《講義》

帝国から市民社会へ
――市民のための社会理論――

庄司　興吉

要旨

市民が、いつのまにか身につけた不確実な知識やものの見方をくり返し取り除きながら、虚心坦懐に社会をどうとらえるのかを考える。社会は共同性、階層性、システム性、生態系内在性という４つの基本相をもっているが、これらのうち、共同性（皆が一緒に生きる）という努力のうちにおのずから階層性（上下の差）ができてしまい、そういう二相の相克から大きなピラミッド形の社会、すなわち階層社会あるいは階級社会ができてしまう。しかし、「皆が一緒」すなわち平等というのと、「上下の差がある」すなわち不平等とはそのままでは共存できないので、この矛盾を宗教、国家、市場、都市などの装置をもって緩和しようとするうちに、社会はシステム化する。システム化した社会の第一の局面が帝国で、帝国は、宗教を背景にピラミッド形社会の頂点にある身体を特異化し、そうして生まれる王や皇帝のもとに国家をつくり、市場化しはじめる経済を統制するために都市を発達させて、理念にしたがってできるだけ版図を広げようとするが、生産力基盤が農業であるため中途で必ず挫折する。これにたいして市民社会は、システム化する社会の第二の局面で、都市で成長した市民が、市場経済を拡大しながら、宗教を科学技術に置き換え、国家の運営方式を民主主義化して、都市的な社会を世界中に広めていく。しかし、その資本主義的なやり方が資本家階級と労働者階級の対立を生み出すばかりでなく、その基礎にした共同性が国民（ネーション）であったため、有力市民社会が国民国家をつくって争いあいながら世界中を植民地化したばかりでなく、帝国主義戦争で人類を絶滅の淵にまで追いつめた。この危機はかろうじて乗り越えられたが、植民地から独立した新生社会のほとんども国民国家をつくり、すべての国民国家間の経済競争がつづいて環境破壊を拡大してきているため、今や地球生態系そのものが危機に瀕している。この窮状を打開するためには、人間社会も自然の一部であることを認識し、国民国家どうしの対立を乗り越えて世界市民社会をつくっていくとともに、それに地球生態系をできるだけ内化して、社会・生態システムとしての地球市民社会を形成していくことが必要である。

From Empires to Civil Society: Social Theory for Citizens

SHOJI Kôkichi

Abstract

How do citizens frankly analyze their society, repeatedly removing uncertain knowledge or views they have unconsciously learnt? A society has four basic aspects --- communality, stratification, system-ness, and ecological restrictions. People raise a society as a communality (to live together), but it is transformed into a stratification (difference between upper and lower) while they are not aware. Through conflicts of these societies, a huge pyramid-shaped society --- a stratified society or a class society ---emerges. However, since equality generated by communality and inequality stressed by stratification cannot co-exist, societies try to mitigate this contradiction with such apparatuses as religion, state, market and city, and are more or less systematized. The first system is an empire. An empire singularizes a body on the top of the pyramid-shaped society with some religion and the thus-born emperor creates a state and builds a city as the center and tries to control economy which is developing market. The empire tries to expand its territory as large as possible for the universal ideas of its religion, but

necessarily fails and falls due to the limitations of its mainly agricultural productive forces. On the contrary, a civil society as the second system is created by citizens who grow up in cities by expanding market economy, by replacing religion with science and technology, by democratizing the state government, and by expanding cities and urban societies to reach all over the world. However, while capitalism generates frictions between the capitalist and the working classes, major civil societies, by putting forward different nations as their basic communalities, struggle each other by their nation states, colonize the rest of the world, and drive the humankind through imperialist wars to a crisis of extermination. This crisis has been barely overcome, but, since almost all newly-born societies, through colonial independence revolutions, have built their own nation states to achieve economic growth, the environmental disruption has extended across the globe so that the global ecological system itself is now on the verge of an unprecedented crisis. In order to break through this predicament, citizens must recognize that human societies are also parts of the nature, create a world civil society overcoming conflicts among nation states, and invent even a global civil society as a social and ecological system by internalizing more and more parts of the global ecological system.

1　全身で世界をとらえる

1.1　市民になり、なり直すために

市民とはどんな人間で、歴史的にどんなふうに現れて、世界に広まってきているのか。どういう意味で画期的であるとともに、どんな問題をもっているのか。いろいろ考えてみると、市民の時代はむしろこれからと言うべきなのではないか。そのためにも、まだ市民になりえていない人びと、つまり未市民と、なったように見えてもいつのまにかまた市民でなくされてしまう人びと、つまり脱市民とは、連携し、世界の市民化をもっともっと進めていかなければならないのではないか。などのことを別稿（**後記**参照）で考えました。

私たちは、いずれにしても市民にならざるをえず、すでになっているか、遅かれ早かれなるのだけれども、一度なればいいというものではなく、少しでも油断しているといろいろな形でそうでなくされてしまうので、くり返し市民になり直さなければならないのだ、というのがポイントでした。市民であることの制度的保障はひとまず普通選挙なのだけれども、選挙制度には多くのばあい不備があり、完全比例代表制によって市民の意思が正確に議会に反映されうるようになったとしても、仲をとりもつ政党やそれに代わる団体の数や競合関係が適切で健全でなければ、民主主義はやはりうまくいきません。

市民社会を実質化する諸制度のあり方は、それじたい市民が決めていくしかないので、市民が自分たちの社会のあり方・行き方を決めていく方式が議会制民主主義である以上、すべての問題はくり返し選挙制度と政党その他のあり方に戻ってきます。いやそれ以上に、私たち市民が、自分たちの社会のあり方をどうとらえ、それをどうしたいと思うかという意欲の問題に戻ってくるのです。市民社会の主権は私たち市民にあるのですから、私たち

がそれをどうしたいかという意思をはっきり示すならば、具体的にそうする方法は必ずあるはずです。

そのために市民は、自分たちの社会の現実をできるだけ正確にとらえることができなくてはなりません。「できるだけ正確に」というのは、複雑でダイナミックに動いていく社会のとらえ方に絶対はないので、社会がこうなってきた歴史の趨勢に照らして自分たちの社会はどんな状態にあるのかを、良いと思う面や悪いと思う面に偏りすぎることなくバランス良く、という意味です。そのために市民は、社会がこうなってきた歴史の趨勢をできるだけうまく整理して、頭の中に入れておかなくてはならないでしょう。

これは、わかりやすくいえば、今の日本の高等学校で教えられている地理歴史や公民などの内容を、一貫した論理でどのように整理し、現代社会の現実をとらえるのに役立つようにするかという問題です。いわば社会についての汎用性の高い根本知識をどのように構築するかという問題なので、市民の、市民による、市民のための社会理論をどのようにして入手するか、という問題だと言っていいでしょう。

そのために、市民はまず、社会をとらえるとはそもそもどういうことか、ということから考えてみなくてはなりません。

1.2　初身体への回帰

社会をとらえるとはそもそもどういうことか。こういう問いを発するとき、じつは私たちは、すでに社会をある仕方でとらえています。いや、より正確を期すると、私たちはすでに、ある仕方で社会にとらえられている、と言うべきかもしれません。

私たちは、生まれて育ってくるあいだに、しつけられ、教えられ、ある社会にある仕方で生きるようつくられてきています。社会学や教育学では、このことを社会化と言います。ヒトが社会のなかで社会化されつつ育たないと、どういうことになるか。それを示すために、アヴェロンの野生児やアマラとカマラの例など、なんらかの理由で野に放置され、オオカミに育てられたためにオオカミのようにふるまうヒトの例が、取りあげられたりしてきました。ヒトが人になるために、そしてさらに高度な文明をになう人間になるために、社会化されつつ育つことは必須のことです。

しかしこのことは、私たちがすでにある社会によって、それにつごう良くつくられてきているということなので、この社会をとらえるためには、私たちは、私たちの身体をこの社会が社会化する以前のものにできるだけ戻してみなければなりません。そんなことはもちろん経験的には不可能なことですが、考える操作としてできるだけそうしてみる必要があります。現存社会の社会化作用の効果をできるだけ取り去った私たちの身体を、初身体と呼んでおきましょう。

社会のなかで社会をとらえるためには、くり返し初身体に回帰しようとしてみることが

必要です。近代のヨーロッパで市民たちが成長してくる過程でも、このことがくり返しおこなわれました。17 世紀に、フランスのルネ・デカルトは、自分が身に着けた中世いらいの学問がすべて疑わしいとして、あらゆることを徹底して疑う方法的懐疑を 17 年間も続け、唯一疑いえないものとして「私は考え続けている、だからその私は疑いなく存在する」という認識に到達しました。そしてその私が「明晰判明」であると考えることだけで、自分とその世界についての正確な知識を組み立て直そうとしました。

18 世紀にドイツのイマヌエル・カントは、この私がどのようにして、どこまで世界とそのなかの私を認識できるのかについて徹底的に考え抜き、私たちに備わっている認識の枠組とそれを用いる作用が、私たちの感覚器官がキャッチする世界の現れすなわち現象をもとにこの世界を構成しているのであり、現れの背後にある物自体やそれらを創りだしたかもしれない神などは、経験的認識の範囲外のもので、むしろ私たちの意志や好みが生み出してきたものだという考え方を示しました。しかし、この認識の枠組や作用も、よく考えてみれば当然のことながら、カントの生きていた社会やその歴史がつくりだしてきたもので、ヨーロッパ人が世界に乗り出し、自分たちのとまったく異なる社会や文明を見出すにつれ、それらがけっして普遍的といえないことが明らかになりました。

そこで、19 世紀の末いらい、オーストリアのエドムント・フッサールに始まる人びとは、私たちがすでに知っている世界を知る、すなわち意識されたものをあらためて意識し直すという認識の仕組みをいつも忘れず、私たちに植え付けられた偏見はもとより、あらゆる自明の前提をくり返し白紙還元――現象学的に還元――しながら、つねに「今ここに」ある世界を新鮮にとらえ直していくよう訴え始めました。このやり方は、私たちがつねに言葉を使って世界をとらえ、そのためにほんらい社会的なものである言葉によってくり返し社会にとらえられるということを逆用して、言葉の分析からこの世界――存在と時間――をとらえ返すという、ドイツのマルティン・ハイデッガーの解釈学的現象学に展開していきます。

フランスのモーリス・メルローポンティは、他方、私たちの身体は両義的なもので、ある意味では自らを意識し、世界を対象化して認識し、変革していく、つまり対自存在なのだが、他の意味では私たちが十分に認識できない存在そのもの、つまり即自の世界に属しているのだ、と主張しました。この考えは、私たちが、自分たちと私たちの世界にたいして謙虚になり、この世界のなかにあることに感謝しながらも、それと私たち自身をできるかぎり良くしていくために、基本的に必要なものだろうと思います。

こういう人たちに学びながら、社会をとらえるために、私たちはくり返し初身体に回帰しようとしなければなりません。

1.3　受けてきた教育の洗い直し

そのためにまず必要なのは、これまで受けてきた教育をくり返し洗い直していくということでしょう。

教育には、学校前教育と学校教育と学校後教育とがあります。学校前教育は、私たちが生まれるやいなや親その他によってなされ始めるもので、広い意味での家族を中心に行われます。学校教育は、周知のように、小学校、中学校、高等学校、大学などを基本としておこなわれます。そして、学校後教育は、私たちの多くからすると、職場での教育とそれ以外の市民生活の場での教育とからなります。

職場での教育は、日本の企業の多くが大学での教育を十分と考えておらず、入社後の研修や職場での教育を重視してきているので重要ですが、それとならんで重要なのは市民生活の場での、とくにマスコミによる教育でしょう。新聞もまだまだ重要ですが、とくに重要なのはテレビで、それに加えてここのところ圧倒的に影響力を強めてきているのはインターネットです。インターネットには、パーソナル・コミュニケーション（パソコミ）の面と、それとマスコミとの中間のコミュニケーション――私はそれをメゾコミと呼んでおきたいと思いますが――の面もあるので、単純にマスコミのなかに入れてしまうことはできませんが、取り急ぎここではインターネットのマスコミ的な面を考えておきましょう（市民のあいだのコミュニケーションとしてのインターネットの重要な意味については、この章の終わりで考えます）。

これら家族、学校、職場、テレビ、そしてインターネットなどは、ルイ・アルチュセールの言い方を借りれば、「国家のイデオロギー装置」です。国家が歴史的にどのようにして出てきて、どのような役割を果たすのかはあとで考えますが、国家は一般に、軍隊などの暴力装置と、徴税してそれを維持するとともに、所得再分配などの役割を果たすための官僚装置に加えて、これらのイデオロギー装置をもっています。とくに国内（社会）を治めていくためには、不満分子や批判集団にたいして暴力を行使するなどというのは最悪の場合で、家庭や学校や職場やマスコミで教育されつづけ、何も言わなくとも税金を払い、内政や外交のさまざまな政策を支持してくれればいちばん良いわけですから、イデオロギー装置をつうじての教育ほど重要なことはないのです。それだけに私たちは、それらによる教育の成果をくり返し洗い出して、徹底的に白紙還元してみようとしなければなりません。

そのさい、知識、情報、データなど、いわゆる知育の成果は、どこでどのように教えられたのか、あるいは学んだのか、もっとも反省しやすいといえましょう。この意味では、知育の成果はもっとも洗い出しやすいといえます。

これらにたいして、これらをつうじてか、あるいは直接間接に教え込まれた倫理や道徳などは、私たちの身体にしみこんで無意識化していることが多いので、反省するのがもう少しむずかしいはずです。つまり、徳育の成果はもう少し洗い出しにくいといえます。例

えば私が子どもの頃、台所に入っていくと母親に「ここは男の子の来るところではない」などといわれましたし、盆踊りの時に近所のおじさんが体中に墨を塗って、「私のラバさん酋長の娘、色は黒いが南洋じゃ美人」などと歌って踊るのを、とくにおかしいとは思っていませんでした。

しかし、これよりもさらにむずかしいのは体育の成果の洗い出しでしょう。体育といっても学校の授業としての「体育」ではなく、もっと深刻な体育です。例えばジークムント・フロイトは、私たちが赤ちゃんの時代から、母親の乳首に吸い付いていて受ける口唇期の教育、少し大きくなってトイレット・トレーニングをつうじて受ける肛門期の教育、さらには幼児期から親やきょうだいに感ずる性欲をコントロールしなければならないという教育、などが成人してからの私たちをも規制していることを指摘しました。フロイトはさらに、私たちの社会が、トーテムやタブーなどをもっていた頃からの集合的記憶あるいはコンプレクスで、私たちを無意識のレベルから他の民族集団などへの攻撃に駆り立て、凄惨な戦争を引き起こしたりすることなども指摘しました。

これらに加えて、ミシェル・フーコーの近代社会批判は、私たちが市民社会としてとらえてきた社会が、セックスや犯罪や狂気などについてのさまざまな言説を流布させ、その渦巻きに私たちの身体を巻き込んで、ちょっとした差異を利用する権力の作用で、ある種の支配構造を維持していくメカニズムを指摘している点で、重要です。私たちが性的なふるまいつまりセクシュアリテなどにかんして、無意識のうちにもなんらかの偏見をもっており、それによって社会のある種の秩序あるいは構造をそれと気づかずに維持することに荷担していないかどうかを、私たちはくり返しチェックし続けていかなくてはならないでしょう。

1.4　ハビトゥスとしての私

こういうふうに考えてくると、アメリカのプラグマティズムの哲学者たちが人間は「習慣の束」であると言ったことにも、あらためて有益な意味を見出すことができます。ウィリアム・ジェームズは、人間の行為を、どういう理由――とくに道徳格率など――にもとづいておこなわれたかよりも、どういう結果をもたらすか、あるいはもたらしたかでとらえるべきだと主張し、人間は生まれたときから生きるために良いと思う行為をくり返してきているので、それらが習慣化しており、そういう習慣の束が人間なのだと言いました。だから教育とは、一言でいえば良い習慣を形成していくことだというのです。

ジョン・デューイはこれを受けて、習慣が多くの人に共有されているのが慣習で、それが社会というものの実質なのだと考えたうえで、人間が変わり、社会が変わるというのはどういうことなのかを論じます。人間は、習慣の束なのだけれども、そのなかのどれをもってしても解決できない問題が生じたばあい、衝動に突き動かされながら知性を働かせて新

しい解決方法を見出そうとする。そのばあいもっとも有効な知性の働かせ方が熟慮で、それが確認され社会的に広がれば慣習が変わり、つまりは制度や社会の仕組みも変わっていくのだと主張しました。

フロイトやフーコーの影響を受けながらフランスのピエール・ブルデューが考えたのは、これにたいして、人間はハビトゥスだということです。ハビトゥス habitus はラテン語で、英語の habit に当たりますから、もともとは同じ習慣という意味です。しかしブルデューは、この概念を民族学や構造主義を背景に深く掘り下げ、私たちの身体が、歴史や社会に規定されつつ無意識のうちにもつ「好み」を基礎に、無意識的および意識的に組み上げていく行動――思惟、判断、選択などの精神作用も含む――の諸性向を指すものに発展させました。思い切って単純化すれば、歴史的に形成され維持されてきている社会構造のなかで、それによって形成されつつ、逆にそれを維持している厚みを帯びた習慣の束ということです。

ブルデューはこのハビトゥスを、現代社会では学校社会のなかで磨き上げられ、完成されて文化資本になるものと考え、文化資本をもつ階級の社会支配、とくに豊かな文化資本をもつ者の子女がそれを継承してさらに豊かにし、それによって社会支配を継承していくという文化的再生産のメカニズムを指摘しました。学校教育による階級構造の再生産については、アメリカ社会について、サミュエル・ボールズとハーバート・ギンタスなども明らかにしたところですが、ハビトゥス概念にもとづくブルデューの文化的再生産論は歴史的かつ社会的な背景の深さを感じさせます。

そこで、こういうところまで来ると、受けてきた教育の成果を洗い直して初身体を洗い出すといっても、ほとんど全社会、全歴史を掘り返すほどの大作業になるのだということがわかってきます。そんなことが私たち市民にできるのでしょうか？　カギは、ブルデューがハビトゥスにもとづく慣習行動（プラティーク）にたいして、私たち一人ひとりが意を決しておこなう行為が実践（プラクシス）だ、と言っていることにありそうです。プラティークを越えてプラクシスに踏み出す契機は、どこでどのようにして出てくるのでしょうか？

1.5　ハビトゥスをたえず超え出ていく私たち

フッサールやハイデッガーの影響を受けたフランスの哲学者かつ作家で、メルローポンティの同時代人にジャンーポール・サルトルがいました。サルトルは、現象学や解釈学的現象学の流れを実存主義として押しだし、しかもそれを意識の流れや参加を強調する 20 世紀小説や戯曲の形で表現したため、第二次世界大戦後の激動期に圧倒的多数の読者を獲得し、その直接的影響は 1968 年の五月革命を超えて四半世紀以上にも及びました。

サルトルの実存主義は、「実存は本質に先立つ」という形で、私たちがまずあること（実存）を強調します。私たちはとにかくまずあるのであって、何であるか（本質）は私たち

が何をするかによって決まってくるのであり、何をするかについて私たちは宿命的に自由なのです。このことを彼は、「人間は自由という刑に処せられている」とすら言います。

彼の小説に即してもっと具体的にいうと、こういうことになるでしょう。1938年の小説『嘔吐』で彼は、ある港町で歴史研究に取り組むアントワーヌ・ロカンタンが、公園のベンチで一息ついているうちに、目の前のマロニエのごつい根に象徴される存在そのもの——即自存在——に吐き気をもよおす場面などを描きます。すなわち、人間も含めてただあることそのものには何の意味もなく、この世界は無意味なのです。しかし、だからこそ人間はそれ自らを出でて立ち、意図的に行動することによって世界に意味を与えていきます。こういうふうに、自らと向き合うことによって世界に意味を与えていく存在——対自存在——としての人間の姿を、サルトルは、1945-49年の長編小説『自由への道』で、マチウ・ド・ラ・リュ——これはどこにでもいる街の太郎というほどの意味でしょう——という形で具体化しようとしました。マチウは、ナチス・ドイツの膨張によって第二次世界大戦に突入していくヨーロッパで、自らの実存に目覚め、対独レジスタンスに参加することをつうじて自らの生きる世界に意味を与えていこうとするのです。

こうして、時代への関与としての参加（アンガジュマン）をキーワードとするサルトルの実存主義は、「各人は自らを選ぶことによって全人類を選択する」、つまり自分が何であるかを示すことによって人類が何であるかを決定していく、とまで言うものでした。このような極度の主意主義——人間とその世界のあり方は人間が何を意志するかで決まっていくという考え方——の面が、彼が先輩とみなしていたハイデッガーからも受け入れられず、構造主義を広めたレヴィーストロースからは、人間的世界の何たるかをまるで知らない考え方であるかのような扱いを受けたのも、ある意味では無理からぬことです。

しかし、さらによく考えてみると、レヴィーストロースの批判を引き出すきっかけになった1960年の『方法の問題』と『弁証法的理性批判』でサルトルが試みようとしたのは、人間的実存の主意性を、歴史的に形成されてくるダイナミックな構造のなかに位置づけることではなかったのか、と私には思われます。レヴィーストロースの構造がその歴史的形成過程や変容の可能性を問わないものであったのにたいして、サルトルの実存主義は、ハイデッガーの解釈学的現象学をより社会的政治的参加に引き寄せたところで、ソ連の権威のもとで教条化していた当時のマルクス主義を柔軟化しながら、歴史的にくり返し形成され直す構造になんどでも挑んで再形成を試みる人間的主体性に鍛え直そうとしていたのです。

こう考えると、フーコー、ドゥルーズとガタリ、デリダ、ブルデューなどが行った研究は、基本的にこのサルトルの試みの延長上に位置づけられるように私には思えます。つまり、ブルデューが集約したハビトゥスとしての人間は、サルトルの言葉を用いれば、「実践的惰性態（プラティコ・イネルト）」——つまりプラティークの堆積——としての構造

にくり返し絡め取られながら、個人的・集団的実践をつうじてそれをくり返し再形成していくのであり、実践すなわちプラクシスの主体を個人から集団へと間断なく広げていく努力を怠らなければ、全社会、全歴史の再形成といえども恐れる必要はないのです。

1960年代当時のサルトルは、集団の内実としてまだ階級に期待していましたが、その後の歴史的経過をふまえて、私たちは躊躇なく、それを連携する市民に置き換えて良いでしょう。すなわち私たちは、市民としてたがいに連携しながら、私たちの身体に染みこんでいる全社会、全歴史の構造を洗い出し、市民間のコミュニケーションをつうじてそれらをくり返し再構成していけば良いのです。

1.6　認識主体としてのネットワーク市民

こうして私たちは最終的に、社会をとらえる認識主体としての、連携する市民、とりわけ最近のディジタル・ネットワークをつうじて連携する市民、に到達します。この意味でのネットワーク市民 network citizen を短縮してネティズン netizen と呼ぶ語法が、1990年代前半のアメリカで始まり、日本にもすぐ伝わったのですが、語感の悪さなどのためか普及し定着していません。そこで私はネットワーク市民と言いつづけますが、その意味が、第一部で展開した市民の歴史に、20世紀の最後の四半世紀以降、世界的に普及しつつあるインターネット革命がもたらしている重大な変化を配慮した、きわめて真面目なものであることをご承知おき願いたいと思います。

インターネット革命はもちろん、他方では、コミュニケーション形態の俗悪化から各種犯罪にまで及ぶ、さまざまな害悪をもたらしています。しかしその本筋が、世界中の市民間のコミュニケーションの瞬時化と対等化、およびこれまでに人類が集積してきた知と情報の一所集積と、それらへの、可能的には平等なアプローチと自由な利用にあることを見失ってはならないでしょう。デカルトやカントの努力をふまえて、フッサール、ハイデッガー、サルトル、メルローポンティ、フーコー、ドゥルーズ、ガタリ、デリダ、ブルデューなどが考えぬこうとしたこと、さらには別稿で見たように、それにもなお限界があるとして、ガヤトリ・チャクラヴォーティ・スピヴァクらが考えつづけてきていることを、私たちはこのような条件のもとにさらに考えつづけることができるのです。

私たち市民の一人ひとりが、ハビトゥスとしての自分をくり返し洗い直し、つくりなおされつつある社会と歴史への参加の方向で社会をとらえなおすこと。その過程と成果を市民間でおたがいに出し合い、つきあわせて、たがいに、より理解可能で、より真理で、より真実で、よい正当なものにしていくこと。そういうコミュニケーションを可能にする基盤として、フッサールは、私たちが意識を意識しはじめるまでにすでに共有している生活世界の存在を指摘し、ドゥルーズとガタリは、欲望機械のような私たちと諸社会がたがいに争い合い、ときに解放されたプラトー（高原）を実現しながら、地下に成長させてきた

モグラの絡み合いのようなリゾーム(根茎)というメタファーを提示しています。インターネットは、こうした生活世界やリゾームのうえに展開しているコミュニケーションの膨大な層で、けっして経済や政治のように階層的にシステム化されることのないネットワークの堆積なのです。

一市民として、くり返し初身体に回帰しようとし、受けてきた教育を洗い流しながら、ハビトゥスとしての私を解体し、私がそのなかに生きている社会を再構築してみましょう。破壊と建築を同時におこなうようなこの作業は、デリダの言葉を借りればまさに脱構築と呼ぶべきものです。誰にとってもはじめから重荷であることがわかりきっているこの作業を担いきれないと感じたら、そのつど同市民間のコミュニケーションにその過程と成果を投げ出しましょう。以下は、そういう覚悟でおこなう市民のための社会理論の試みです。

2　共同性と階層性の相克

2.1　社会の 4 つの基本相

くり返し初身体に戻ろうとしながら、つまり、これまでに染みこんだ知や徳や体のくせなどをできるだけ洗い落とそうとしながら、社会とは何かを考えてみましょう。

私が試みるかぎり、そうすればするほど見えてくるのは、社会とは何よりもまず共同性であるということです。平凡ながら基本的なこととして、皆がいっしょに生きている。皆の範囲は、家族のような小さいものから、地域のような小中大といろいろあるもの、国のようになにか運命的なもの、国をいくつも含んだ大きな地域、そして地球全域をカヴァーする人類のようなものまで、いろいろありますが、皆がいっしょに生きている。共同性は、共同的な関係性の集積ですが、簡潔に共同性と呼ぶことにしましょう。それは私たちの身体のいわばヨコのつながりです。

しかし、そう思うと同時に、私たちは、このヨコのつながりがほとんどいつもタテのつながりにもなっていることに、気がつきます。皆がいっしょなのですが、体力、能力、財力、知力などいろいろな意味での力の差によって、上に立つ者と下に置かれる者とがある。こういうタテの関係性を階層性と呼ぶとすれば、社会はまた階層性の大きな集積です。古代の王や皇帝や貴族と人民や奴隷との関係性、ヨーロッパ中世の王侯貴族と市民や農奴との関係性、日本の中世の将軍や大名や武士と町人や百姓との関係性、そして近代資本主義が展開しはじめてからの資本家階級と労働者階級との関係性などが、そうした集積の代表的なものでしょう。こういう認識から、「これまでのすべての社会の歴史は階級闘争の歴史である」という洞察も生まれました。

が、さらに身体に染みこんでいる知や徳やクセを洗い流そうとしながら考えてみると、この共同性・階層性もけっして一つだけではなく、主要なものだけでもいくつかあって、

しかも入り組んでいることがわかります。例えばある人は、家庭では父親で妻と二人の子があるが、会社では従業員 100 人のうち 5 人いる課長の一人であり、日本の○○県△△市に住んでいて所得税や住民税を払っている、等々といった具合です。人によってはなんらかの政党の党員で、その地区の副支部長を務めていたり、ある途上国支援の NGO のメンバーで、本当はもっと積極的に活動したいのだけれども、暇がないのでせめて会費を払って活動を支えている、などということがあるでしょう。

これらはそれぞれ共同性と階層性のセットですが、どちらか一方としてしか意識されていないかもしれません。また、階層性だけを取り出してみると、いろいろな階層性でいずれも上のほうにいたり、いずれも下のほうにいたりということもありますが、ある階層性では比較的上にいるのに、他の階層性では下のほうにいるなどということもありえ、「地位の非一貫性」などと呼ばれたりします。要するに社会は、複雑に入り組んだ共同性・階層性の大きな集積なので、個人はこのなかでいくつかの、あるいはいくつもの、地位と役割のセットなのです。この面を社会のシステム性と呼び、この面から見た社会をシステム〔性〕としての社会あるいは社会システムといっておきましょう。社会が近代化さらには現代化されるほど、この面が強くなってきていることは明らかなように思われます。

しかし、さらに徹底して初身体に戻ろうとしてみると、こうした大きなシステムも、自然のなかにつくられた人工物で、蜂の巣や蟻塚のように自然の一部にすぎないことが見えてきます。人間は、人間だけが巨大な都市をつくり、鉄道や道路を走らせ、世界中の主要都市を航空網で結んでいると思っていますが、人間の社会じたいもともと自然の一部なのですから、それがつくりだすものもすべて自然の一部なのです。その意味では人間とその社会は、どんなに暴れ回ろうと、孫悟空がお釈迦様の手のひらのうえを抜け出られないように、自然を抜け出すことはできません。

しかも、より厳密に考えてみると、この自然はせいぜい地球上にできている生物の棲息範囲、つまり地球生態系を大きく越えないものです。人間は、宇宙の彼方を観測したり、遠い天体に向けてロケットを飛ばしたりしていますが、自分自身が地球の重力圏を抜け出すときには、ロケット、宇宙船、宇宙服などで地球生態系と同じ環境を持ち出さなければなりません。この意味で人間とその社会は、基本的に地球生態系内在的であり、生態系内在性という制約を抜け出すことはできないというべきでしょう。

2.2　共同性としての社会

社会の共同性、階層性、システム性および生態系内在性がどんなふうに関係しあっているかを考えてみましょう。この場合でも、私たちの身体に染みついているクセや愛着、仏教でいう執着をできるだけ捨て去ろうとする努力を怠ってはなりません。

まず共同性ですが、およそ私たちの社会は最初共同性そのもののようなものです。それ

がそのまま、それと気づかれずに、つまり即自的に存在しているので、共同性がそのままそこにあるように、つまり実体になっているように見えます。こういう社会のあり方は共同体と呼ばれ、オーストラリア先住民のバンド、中央アジア遊牧民のホルドなどを典型として、原始共同体とも呼ばれました。

こうして社会は共同体から出発しますが、それが大きく複雑になっていくにつれて、しだいに共同体のようには見えなくなります。しかし、共同性は社会の大事な特徴つまり属性なので、なくなってしまうわけではありません。私たちが、社会の出発点を共同性と呼び、共同体と呼ばなかった理由がこれでわかっていただけると思います。

共同性が共同的関係性の総体であることはすでに述べました。共同的関係性の集積としてまずあるのは家族です。家族は、モーガンやエンゲルスの段階では個体の、性的、年齢的秩序もはっきりしない大きな集合、つまり雑然とした大家族が出発点のように考えられていましたが、その後の研究で夫婦関係を中心に数名の子どもがまとまった、いわゆる核家族に近いものが起点と考えられるようになりました。そのような家族が数個、多い場合でも十をあまり大きく越えない程度でまとまって、一つのバンドあるいはホルドをつくる。

これがデュルケムのいう単環節社会で、これをこれ以上に分解しようとすると社会とはいえなくなる。つまり、単環節社会が社会の単位なので、それがいくつかつながって多環節社会をつくり、大きな社会になっていく。しかし、いくら大きくなっても、この型の社会つまり環節的社会には性別と年齢別を基礎にした自然分業しかないので、なにかあるといつでも環節単位でバラバラになってしまいます。人類の歴史の起点をどこにとるかによりますが、かりに500万年前のアウストラロピテクスのあたりからみるとすると、その大半の期間、人の社会はこのようなものでした。自然界におのずから成る植物をとる採集、陸と空に棲息する動物をとる狩猟、川や海に棲息する魚類をとる漁労を基本手段として、食料を求めてさまよいながら生き延びる人には、このような社会しかありえなかったのです。

ようやく1万年ほどまえに人は農耕（と牧畜）を覚えて定住するようになり、集団労働をつうじて、指揮する者とそれに従う者とを基本とした社会分業が生ずるようになり、食料を中心とする富も蓄積できるようになって、分業と富の分配とのあいだに意味のある関連も生ずるようになりました。指揮的でそれだけ高度な労働をする者がそれだけ多く富の分配にあずかるのは、いわば自然なことで、そんなふうにして社会分業が定着し、少しずつ拡大していったはずです。

こうして社会は環節的なあり方から有機的なあり方すなわち有機的社会に変わっていき、大きくなっても有機的分業で結ばれているだけに簡単にバラバラになったりはしない、しなやかな組織に変わっていきました。それでも、まだ基本的には、皆がいっしょになって生きているという共同性とその意識は維持されていたはずです。

2.3　階層化する社会

しかし、人びとのあいだに社会分業をつうじて生み出されていった地位と役割の差は、いわば目立たない――潜在的な――階層性であり、やがて目立つようになる――顕在的な――階層性の基礎でした。社会分業も最初は、自然分業と同じように、体力の差や能力の差など自然にあった差にもとづいて起こったはずです。が、それが蓄積可能となった富の分配と結びついていくと、個体的に、また家族的に固定しがちになり、それと結びついた富は、個体または家族の所有あるいは所有物すなわち財産とみなされるようになっていきました。いわゆる家族的私有財産の起源です。

それでも、人びとは社会を共同性と考え、そのようにふるまっていたはずです。共同性としての社会が農耕をおぼえて定住するようになり、社会分業が発生して個体間家族間に地位と役割の差が生じ、財産の差が目立つようになっていったとしても、社会の共同性はそんなに簡単に傷つくようなものではなかったと考えるべきでしょう。この点は、のちにみる階級闘争史観の失敗との関連で、たいへん重要なことです。

社会は共同性だと思ってそのようにふるまっていた人びとのあいだに、階層性が目立つようになり、人びとがそれを意識し、そのようにふるまわざるをえなくなっていった過程、すなわち潜在的な階層性が顕在化していった過程には、社会そのものを巻き込むような大きな暴力の介在があったと思われます。共同性としての社会はいわば内向きの集団つまり内集団ですが、このような社会が二個以上出会って向き合うと、互いに外向きの集団つまり外集団になります。そして、たがいに外集団を自然の一部つまり環境としてばかりでなく、ときに意図的に自分たちに危害を加える敵（ヤツラ）とみなして、ワレワレ感情を強めるようになる。

一つひとつの社会が豊かで自足していれば、それらがたがいに無関心のまま共存あるいは棲み分けしたり、平和的な交渉をつうじてより大きな社会にまとまっていくことも可能だったでしょう。しかし、歴史的にみるかぎりでは、多くの社会は多かれ少なかれ厳しい自然環境のなかで、多くのばあい豊かで自足するというわけにはいかず、外集団に向き合うと、たがいに相手の持っているものを奪おうとして、最後には実力行使におよんだはずです。

一つの社会からすると、外集団は自然環境の一部です。一つの社会は自然環境にたいして農耕や牧畜で挑み、食料その他の生活手段をえて生きてきているわけですから、自然環境の一部としての外集団に農具をもって挑み、そのもてる食料や生活手段を奪おうとしてもべつに不思議ではない。このとき農具は武器となり、それじたいも社会であるがゆえに抵抗する外集団との争いは、それこそ「食うか食われるか」の抗争になったはずです。戦争の起源です。すなわち戦争は、外集団である他社会を自然の一部とみなして――そのように対象化して――、そこから富を奪ったり、逆にその凶暴さから自社会を守ろうとする

ことから生じたし、今でも生ずるのです。

戦争の結果、負けた社会が勝った社会に組み込まれるばあい、負けた社会の指導層は多くのばあい殺されるなどして除かれます。負けた社会の被指導層が勝った社会の被指導層のしたに組み込まれ、大きくなった社会のなかに階層性が目立ってきます。このために、共同性の意識とふるまいによって覆われていた、勝った社会内部の指導層と被指導層との階層差も目立ってくる。こうして、ひとまわり大きくなった社会——これ自体も社会としてのまとまりを維持するかぎりでは共同性なのですが——のなかに、階層性がはっきりと眼に見えるようになってきたのです。

2.4　社会膨張のダイナミズム

共同性としての社会同士が衝突し、戦争となり、負けたほうが勝ったほうに組み込まれるという過程をくり返しながら、社会はしだいに大きくなっていきました。この過程を社会発展と呼ぶこともできますが、発展という言葉にはふつうプラスの価値判断がつきまとっているので、たんに社会膨張と呼んでおきましょう。社会膨張は、強い社会の側からする弱い社会の排除と包摂の過程です。

図 1 をご覧ください。A, B, C という三つの社会があり、その力の差が A＞B＞C という順だったとすると、戦争の結果、社会は右側に描いたような、共同性と階層性の矛盾と統一、すなわち矛盾的統一体となるでしょう。これが階級社会の原型です。戦争の結果として、社会 B, C の指導層 B′, C′ は殺されるなどして除かれ、排除されます。大きな社会は、社会 B, C の被指導層が社会 A の価値を受け入れる——いやいやながらにせよ、時として喜んでにせよ——かぎりで包摂され、新しい大きな共同性になる。しかし同時にこの社会は、A′ を頂点として A, B, C という階層序列を今やはっきりと表した、新しい大きな階層性にもなるのです。

この社会膨張モデルを当てはめてみて、日本人にとってもっとも理解しやすいのは、戦国時代の例でしょう。15 世紀後半室町幕府の衰退とともに始まった群雄割拠は、まさに図 1 のような過程をいたるところでくり返したあげく、16 世紀末の信長、秀吉、家康による全国統一にいたりました。このかん勝者が敗軍の将とその一族をどのように排除し、その配下の民をどのように包摂していったか、多くの物語が語ってやまないとおりです。日本では、このような過程をつうじて日本的な封建制が形成されていきました。

しかし、この社会膨張モデルは基本的にはそれ以前にもそれ以後にも当てはまるものです。日本では古代国家の形成過程がこのようなものでしたし、このような過程は、エジプト、メソポタミア、インダス河流域、黄河流域などいわゆる四大文明が起こった地域における社会形成にも、それ以外の地域の社会形成にもほぼ共通してみられたものであったといっていいでしょう。

いわゆる古代奴隷制の形成がこれに関係します。つまり、図にみるBやCが奴隷なのですが、Cが包摂されるまでにBがAに内化され「同化」されてしまっていれば、平民A+Bにたいして奴隷Cが生じます。しかし、肌の色の違いなどに象徴される人種的差異からBのAへの内化や同化がなかなか進まないと、BはAとCのあいだにいわば異化され、平民A、准奴隷B、奴隷Cというような複雑な階層性が生じていきます。古代インドで、今日になってもなお容易に克服されがたい、カースト制の原型が築かれたのはおそらくこのようにしてであったでしょう。

近現代のアメリカ合州国でも、同じようなことが起こりました。アメリカ合州国は、主としてイギリスから植民していった白人たちが、先住民を征服し、それだけでは足りなくなった奴隷労働力をアフリカから輸入した黒人たちに担わせてつくりあげていった社会ですが、19世紀以降、ヨーロッパからのアングロサクソン系以外の移民やアジアなどからの移民が進むと、これらの人びとは肌の色の相違などから、いわゆるWASP（白人でアングロサクソンでプロテスタントの人びと）と黒人や先住民とのあいだに入り、複雑な人種のピラミッドをつくりあげていきました。これらの人びとが「星条旗」のもとに一つの共同性を演出しつつ、1950-60年代の公民権運動後もなお、隠然あるいは公然たる人種抗争をくり返しているのが、今日のアメリカ合州国の姿なのです。

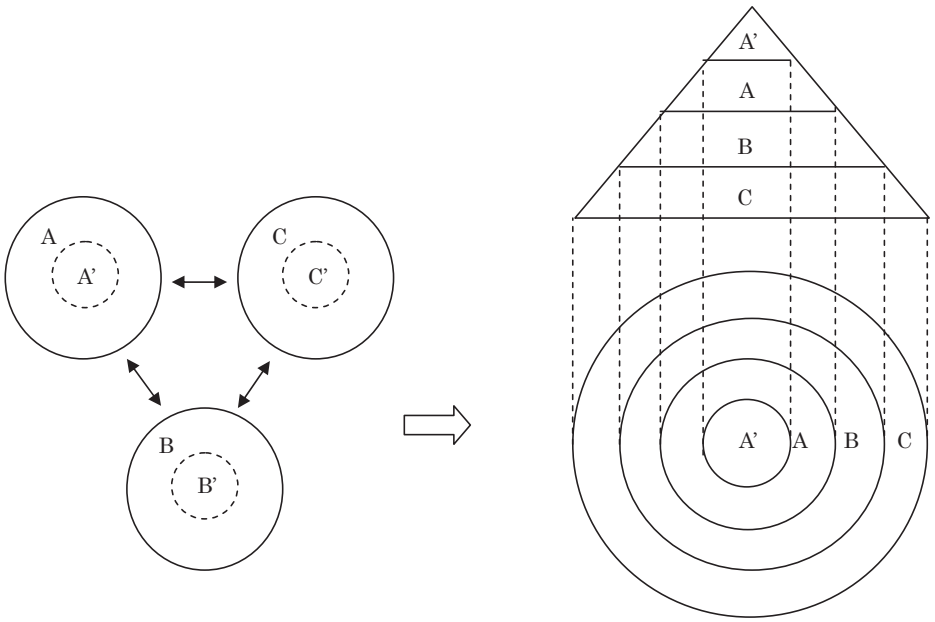

図1　　社会膨張のダイナミズム

2.5　民族と階級の起源

これらにたいして、日本のように、社会膨張のもととなった社会同士の肌の色の差が小さかったばあいには、図にみるAとB、BとCなどのあいだの内化や同化が早く進み、その分だけA′つまり支配層とA, B, Cなど被支配層との差が目立ち、強調されるような社会形成が進みました。日本では、もともとA′は天皇家とその周りの支配層だったわけですが、その支配実務を請け負っていたAの一部がA′を乗っ取るようになり、うえにみた戦国時代の抗争をくり返したあげく、幕藩体制という中央集権的な封建制――分権性が封建制の特徴だとするとこれは矛盾なのですが――をつくりだします。

幕藩体制は「士農工商」という身分秩序を強制して支配を維持しようとしたわけですが、それも最後は、富を集中し、実質的な支配力を手中にした商人たちに屈することになり、この商人層と下級武士層の一部からでた近代国家官僚層とによって、日本社会の資本主義化がおこなわれていくことになりました。このような日本社会の膨張過程をつうじて目立つのは、包摂されていった共同性のしつこい残存というよりは、それら同士の内化や同化であり、結果として大きな共同性のうえに成立する支配・被支配の階層性です。

つまり、社会膨張の過程をつうじてしつこく残存する共同性を民族と呼び、あまりしつこくないがゆえに内化あるいは同化しあった共同性が、支配・被支配の軸に沿ってタテの序列にまとめられたものを階級と呼ぶとすれば、日本社会は、もともと肌の色の違わない――つまり人種差の小さい――人びとからなる小社会間の抗争から出発したがゆえに、インドやアメリカとは違って、相対的に、人種・民族問題よりは階級問題あるいは階級闘争の目立ちやすい社会に、展開していったのです。

こうして私たちは、民族と階級という、19世紀から20世紀にかけてのヨーロッパと世界を揺るがした、大きな問題にも眼を向けることができます。ヨーロッパの資本主義は、国民すなわちネーションという近代的に再編された共同性を、基盤にも単位にもして発展したものでした。ですから、別稿で見たように、それらは最初から国民国家単位で競合し、たがいに戦争しあいながら世界中を植民地化して、19世紀の後半にもなると、いわゆる植民地再分割の世界戦争に突入しようとしていたのです。

資本主義各国で19世紀をつうじて急速に成長してきた労働者たちは、これにたいして「労働者階級に祖国はない」との立場から国際主義すなわちインタナショナリズムを打ち出し、とくに第二インターをつうじて帝国主義戦争に最後まで反対しようとしました。しかし、第一次世界大戦直前になって、ドイツ社会民主党が「祖国防衛」の戦争に賛成する立場を打ち出し、対抗的にフランス社会党も同様の立場を打ち出して、第二インターの崩壊につながってしまったことは有名な事実です。国際労働運動の背後にあった当時のマルクス主義は、階級的団結の幻想にとらわれていて、当時まだヨーロッパ諸国民を引き裂いていた民族の怖さを知らなかったのです。

その後のイタリア、ドイツ、日本におけるファシズムの恐ろしさ、労働者のインタナショナリズムを引き継いだはずのソ連の「大ロシア排外主義」、結果としての中ソ対立や国際共産主義運動の崩壊などをつうじて、私たちはようやく、階級の幻想から解放されるとともに民族の呪縛からも解放されようと努めるようになっています。しかし、社会膨張という社会形成の根源から発した諸問題の解決のためには、民族と階級の問題を根底から乗り越えるさらに高度な社会理論が必要なのです。

2.6　階級闘争史観から市民社会史観へ

階級闘争史観の誤りは、社会の階層性が共同性をふまえずに、むしろそれを破壊しつつ現れてくるかのように考えたところにありました。もっとも卑俗な資本主義史観が「共同体の崩壊と資本主義の発展」というとき、その歴史過程の単線的なとらえ方のうちにその誤りが典型的に現れています。

資本主義の成長は、たしかにムラ（村落共同体）やマチ（都市共同体）など前近代的共同性を破壊しつつ起こるのですが、同時に共同体に埋没させられていた諸個人を解放し、一方的にせよ彼らを包摂するより大きな共同性を広げつつ進むのです。都市あるいは農村から出て最初に事業を起こした市民すなわちブルジュワは、工場制手工業つまりマニュファクチュアから機械を導入して工場制大工業へと進む過程で、商品および労働力市場という、古い共同体を捨てて集まってきた諸個人を包摂するより大きな共同性をつくりだしていきました。

この大きな共同性にうえに、たしかに資本家階級（ブルジュワジー）と労働者階級（プロレタリアート）とのタテの関係を軸とする階層性が築かれていくのですが、それにたいして労働者階級は、労働組合を結成して階級闘争を挑むとともに、他方では普通選挙を要求して、商品・労働力市場に市民民主主義を加えたより大きな共同性をつくりだしていくのです。こうして市民社会は、資本家階級が主導する資本主義社会（ブルジュワ社会）という階層性と、労働者階級を含めた全市民の民主主義社会（シティズン社会）という共同性とによって、立体的に構成されていくことになります。

階級闘争史観は、ブルジュワ社会とシティズン社会という、この市民社会の二重性を明確に把握することができなかったばかりでなく、この二重性の基底に、民族と階級という、社会膨張のダイナミズムに発する、より深刻な問題があることをも見透すことができませんでした。シティズン社会は、人類史的な視野からすればまだまだ限定された共同性で、ヨーロッパの主要ネーションが、世界のほとんどの地域を植民地化しつつ、たがいに争いあいながら築き上げていったものにすぎなかったこと、20 世紀の二回の世界大戦とその後の米ソ冷戦をつうじての核戦争による人類絶滅の危機は、この延長上にもたらされたものであったことを、私たちは忘れるべきでないでしょう。

社会膨張のダイナミズムをつうじて生み出される、より大きな共同性とより大きな階層性との弁証法的な関係、その背後にある暴力の問題、それに突き動かされて起こる共同性間の内化、同化、異化の問題、その結果として起こる民族と階級の問題こそ、社会理論の根本問題です。そして、この問題を解くためには、私たちは、社会の共同性と階層性との相克から発する膨張のダイナミズムが、より大きな共同性のうえにより大きな階層性を載せたより大きな階級社会を築き上げていく面ばかりでなく、共同性と階層性との矛盾を緩和するためにいくつかの重要な社会統合装置を編み出し、それらによって社会をシステム化していく面をもみなければならないのです。

共同性と階層性との相克は、この意味で、社会にシステム性を創発させ、社会膨張に新たな構成作用を発生させていきます。市民社会史観は、この面を詳細に考察することをつうじて、初めて現代的な市民社会を分析し、把握するに耐えうるものとなっていくのです。

3　宗教・国家・市場・都市

3.1　平等と不平等の矛盾を緩和する

農耕を始めて富の蓄積が可能になるとともに、共同性としての社会同士が衝突して階層性を生み出すようになり、共同性と階層性の相克から社会膨張のダイナミズムが発生して、大きなピラミッド形の社会すなわち階級社会が形成されはじめる経過と、そこから生ずる民族と階級という大きな問題の解決の方向についてみました。それを貫いて人間の社会史における暴力という深刻な問題があるわけですが、それと対決するためにも、私たちはまず、共同性と階層性とはなぜ相克するのかという問題に取り組まなければなりません。

相克の理由は、簡単ですが、人類史の存在理由にかかわるほど重要なことです。共同性は、皆がいっしょに生きているということですから、平等の感情と緊密に結びついています。性と年齢にもとづく自然分業は、この感情に抵触しないかぎり許容されています。のちに高度に複雑化した社会で、自然分業を社会的に補強し、拡大したり固定したりしたものが性差別（セクシズム）や年齢差別（エイジズム）として非難されるようになりますが、そのことについてはまたあとで触れることにします。

共同性と結びついた平等の感情はそれなりに強い惰性をもっているので、すでに述べたように、共同性の内部にある程度の社会分業が生じても、それを必ずしも不平等とは感じません。不当であるという認識と結びついた不平等感が生ずるのは、やはり暴力が介在することによって顕在化した階層性にたいしてでしょう。このことは、人間の社会が複雑化すればするほど社会分業の結果としての地位と役割の分化は生じざるをえないが、そのさいそれを不平等と感ずるかどうか、を決定する要因としても重要です。社会が市民社会として民主的になっていけばいくほど、そういう不平等感は少なくなっていくものと期待し

ていいでしょう。

さしあたりは、共同性と結びついた平等感と、何らかの形で暴力を背景とする階層性と結びついた不平等感との、葛藤が重要です。この葛藤は、ほんらい社会は共同性を基礎とするものという認識からすれば矛盾なので、人びとがこの矛盾を何らかの形で納得しなければ社会を維持することはできません。そこでこの矛盾を、何らかの形で必然的なもの、できれば社会にとって望ましいもの、悪くてもやむをえないものなどとして人びとに受け入れさせる、何らかの装置が必要になってきます。これらによって社会は自らをまとめて維持していく、つまり統合していくので、これらは社会統合の装置といっていいでしょう。

それらのものとしてまず考えられるのは宗教と国家です。これらは、農耕の開始すなわち農業革命以前から人間がおこなっていた、言語その他を用いるシンボリズムと深く関係する、その意味で高度に人為的な装置です。これにたいして、富すなわち余剰農産物その他の発生とともに人間がおのずからおこなうようになっていった財やサービスの交換、すなわちもっとも広い意味での市場は、むしろ人間の自然の発露のように見えるのですが、人びとがいわば下から自然発生的につくりだしていった装置として、社会膨張と、とりわけ社会のシステム化にかかわる重要な働きをしつづけてきました。

これからみるように、宗教や国家と市場とはしばしば対立的に作用します。すなわち、宗教や国家が進める社会統合にたいして、市場はしばしばそれを攪乱するように働くので、宗教や国家はそれを制御して自らの望む社会統合を実現しようとするために、社会の中心としての都市という新たな装置をつくるようになるのです。そして、文明が都市を中心にして生起し、社会のシステム化もそこから展開するようになるのです。

3.2　宗教は最初の社会統合

社会の共同性にもとづく平等感と階層性にともなう不平等感との矛盾を説明し、納得しあう最初の方法は、社会がそれらの由来についての物語をつくり、それを語り合うことであったろうと思います。われわれがある神を奉じてこのような生き方をしていたところ、別の神を奉じて違う生き方をする人びとが現れたので、われわれの神はその神を征伐して人びとを救い、われわれのシモベとした。シモベとの交流も進んで社会の一体感が増したころ、また別の神を奉じて違った生き方をする人びとが現れたので、われわれの神はさらにその神をも従え、人びとを新たなシモベとした。

これは、2.4 で述べた共同性の排除と包摂のダイナミズムからすれば、人びとのあいだの類似性が強く、同化が優先しておこなわれえた例ですが、肌の色などで人びとのあいだの相違性が強く異化がおこなわれざるをえないばあいには、物語はそれに合わせてつくられるでしょう。いずれにしても包摂と排除がそうとう進んで、神がみの神やそれらすべてを超越する絶対者のようなものが考えられるようになると、絶対者や神がみの神によって

世界がこのようにつくられ、諸物と人びとがこのように配置されて今日のような世界と社会の秩序になったのだという、いわゆる創世神話のようなものができてきます。日本民族も古代ギリシアの人びとも古代イスラエルや中国の人びとも、皆このような神話を語りながら、それぞれの、膨張して大きくなる社会の統合を図っていったことは明らかです。

こうした神話を語るということは、もちろん口先だけでなく全身でおこなわれることなので、語りは歌や踊りともなり、そこから儀式が生じます。人びとは生活のために働かなくてはなりませんから、こうした儀式は特定の時に特定の場所でおこなわれるようになり、そこから時間と空間の聖と俗の分割もおこなわれるようになる。というよりも、このようにして人びとに固有な時間と空間が作られていく。柳田民俗学の用語でいえばハレとケの創出、ヴィクター・ターナーの用語でいえばコミュニティとストラクチュアの創出です。

聖別された場所には教社——教会や寺院や神社などを一括してこういうことにしましょう——が建てられ、特定の時にその周りで儀式つまり祭がおこなわれるようになり、教社や祭をとりしきる聖職者と、ふつうの、いわば俗職者との区別もなされるようになって、それを中心にすでに進んできていた社会分業の相互確認もおこなわれます。神話と儀式の解釈はやがて教義——それを文書化したものが聖典——となり、教義と教社と聖職者とがそろって聖俗分割のおこなわれた世界と社会を統合するようになれば、これがすなわち宗教です。宗教はこの意味で、社会統合の最初の装置であり、最初の社会統合そのものなのです。

デュルケムは、この意味で、社会は人びとの集合意識によって成り立つのであり、集合意識そのものなのだといいました。人びとは、宗教という集合意識——それが狭い意味での意識だけでなく、その意識のもとにおこなわれる諸行為をも含むことは明らかです——によって、共同性にもとづく平等感と階層性にともなう不平等感との矛盾を乗り越えて一体となるのであり、そのようにして社会は合意すなわちコンセンサスをえて統合されていくのです。

マックス・ウェーバーは、このようにしてつくられる、基本的に非合理的なシンボリズムの装置が、人びとが生きるために毎日おこなわざるをえない経済活動、すなわち私たちの用語でいえば市場とどのように関係することになるのか——それを抑止するのか促進するのか、そのどちらかであるとしてどのようなメカニズムで——を、つまり合理化のあり方と進み方を、社会史の進展を左右するカギとして重視しました。その一例を、私たちは別稿 3.1 ですでにみています。

3.3　宗教の物化したものが国家

宗教はそれじたい社会の全身的な世界認識であり、世界創造ですが、教義を見れば明らかなように、そのなかには経験的な——すなわち現実世界と対応させられうる——部分と、

そうでない超越的な――すなわち人間の願望その他が言語的に表出されたもので現実世界に対応物のない――部分とがあります。宗教というシンボリズム全体のなかでは超越的なものが経験的なものを統御しているのですが、社会が膨張して複雑になり、経験的な部分が増えるにつれて、それらが超越的なものの統御から脱けだして、相対的に自律する傾向が強まってきます。

この場合でも、共同性としての社会どうしが衝突して現れる暴力が、決定的な役割を果たしたことでしょう。暴力は、あらゆる幻想を打ち砕き、強いものを勝たせ、弱いものを粉砕します。戦略戦術に長けた智将の活躍で多少は左右されるかもしれませんが、基本的には「神のお加護」など関係なく、生産力に裏付けられた武力でまさったものが勝つのです。これは最高度に経験的な真実ですから、社会はどれも、武力を担う軍隊を装備し、それを維持するために徴税し、徴税その他の実務を管理するために、指導者あるいは支配者のものか社会全体のものか区別のつかない行政装置――ウェーバーのいう家産官僚制――をもたざるをえなくなります。

小さい社会では、例えば邪馬台国の卑弥呼のように、シャーマン性を帯びた宗教者が、こうした軍隊や家産官僚制の長を兼ねていたと思われますが、これらの規模が大きくなるとそんなやり方ではとうていすまなくなり、宗教者からは相対的に独立した為政者が軍隊と家産官僚制の指揮をとるようになっていったはずです。いわゆる国家の成立です。国家の長がいわゆる王で、社会膨張が進んで国家が巨大になり、帝国となると、それが皇帝となるわけですが、王や皇帝もその権威は宗教から借りようとし、広い意味での神政がそのごも長く国家の一般的な統治形態となっていきます。

こうして社会統合の装置としての宗教のうち経験的なもの、すなわち現実世界にふれてそこに働く力――とくに暴力――を制御せざるをえないものが、軍隊とか家産官僚制とかいう具体的な形をとって定在することになるわけなので、国家は宗教のうちの、そういう物理的な力の行使にかかわる部分が独立したもの、いわば宗教の経験的社会統合にかかわる部分が物化あるいは物象化したものということができます。物化とか物象化というのはマルクスやウェーバーの言葉ですが、デュルケム的にいえば「もののように」なったものということができるでしょう。国家が「階級支配の道具あるいは手段」となるのは結果としてのことなので、そういう道具主義あるいは手段主義的な考え方では、国家が今日でももっている、なにか超越的な力を理解することはできないでしょう。宗教的なものの力が弱まった今日、国家は逆に、権力の装置であるだけでなく、かつて宗教のもっていた権威の力を引きずっている面もあるのです。

王や皇帝のもつ特異身体としての性格にも、ふれておかなくてはならないでしょう。国家が宗教から相対的に独立して以後もなお宗教の権威を借りつづけるために、社会は特定の身体を経験的世界と超越的世界との境界線上の一点に祭り上げ、特異点上の特異身体と

しました。この身体はしばしば「神の申し子」であったり「化身」であたりすると同時に、生身の人間として繁殖しなければならないので、数十数百どころか数千の后や側室をもったりし、それでも「世継ぎ」をえられない悲喜劇を演じなければならなかったのです。

3.4　人間的自然としての市場

宗教や国家が社会を統合しようとしてもっとも手こずったのは、おそらく人びとがモノやサービスを勝手にやりとりしてしまうということでした。人は昔から家族のなかで、身体やモノをやりとりして生きてきています。女が男に身体を与えるのも、男が――その見返りとしてにかぎらず――女に食べ物や衣類を与えるのも、子どもができて二人で一所懸命に乳や食べ物やその他の保護を与えるのも、すべて愛情のやりとりで、これは時として家族の範囲を超えて環節的社会の内部にまでおよんでいたはずです。このやりとりを感情――愛情は時に嫉妬や憎悪などに転化します――の交換という意味で交感と呼ぶとすれば、交感がすべての経済行為の基礎だったのではないでしょうか。

社会が農耕をおぼえて生産力にゆとりが生ずるようになると、こうした交感が、環節的から有機的となっていく社会の各所に広がりはじめ、時として他の社会とのあいだにも発生したりするようになったはずです。何らかの理由で一人で生きていかざるをえなくなった女が身体と引き換えにモノやサービスを求める売春や、社会と社会との戦争のけっか生まれた奴隷を売買する行為もこうしたなかで生じたはずで、交感は、こうした猥雑な諸行為をも含みながら一般的な交換に展開していったと思われます。だから、交換という行為とその連鎖として生ずる市場とは、社会存続の基調をなす人間的自然の発露のようなものだったのです。

かつてカール・ポランニィは、人間の身体や労働力まで含めてあらゆるものを商品化していく資本主義的交換の場、すなわち市場を「悪魔の挽き臼」と呼び、このような交換は近代資本主義の侵略を受ける以前の社会にはなかったものだと主張しました。資本主義世界市場への「大転換」以前には、多くの社会で経済的行為は社会のなかに埋もれていて、恥も外聞もなく貨幣換算される露骨な取引がおこなわれることはなかったのだというのです。それはそうだったろうと思いますが、彼の主張は、私のいう交感から発した広義の交換が、環節的から有機的へと転化しつつ拡大していく社会の内部に広がり、他の社会とのあいだにも広がっていったことを否定することにはなりません。広義の交換は、すでにして生物的であるばかりでなく、かぎりなく社会的であり、近代資本主義になって顕在化する露骨な商品交換よりも、はるかに浸透力のあるものであったはずだからです。

ゲオルグ・ジンメルや高田保馬はすでに、こうした交換の無制限な波及力に注目し、文明化の前後をつうじて始まった交換の連鎖が、家族や民族という基礎社会のうえに市場という派生社会を広げ、やがて世界的規模に拡大していかざるをえなかったという見方を提

起しています。交換はそれじたいなんらかの約定や規範を生み出していくので、慣習法までもが法であるとすれば、この法は、商法専門から出発した田中耕太郎がかつていったように「世界法」に展開せざるをえないものです。そして、田中自身「法あるところに社会あり、社会あるところに法あり」という格言をくり返していたわけですから、この田中の説を用いて高田がいうように、市場を基礎とする人間の社会はやがて世界社会となっていかざるをえないはずのものなのです。

この視点は、宗教や国家がけっきょくは市場を統御しきれず、市民社会への道を拓いていかざるをえなかった歴史の経過を見るうえで、かぎりなく重要なものです。そのためにも、私たちはつぎに、都市という、市場社会の市民社会への展開の軸となっていった、社会統合のいわば究極の装置をみておかなければなりません。

3.5　社会統合の要としての都市

人間的自然の発露としての交換は、売買春や奴隷売買などの猥雑さも含みながら、社会のいろいろな所に、そして時には社会と社会との境界領域などにも、その場をつくろうとします。多くの人はそこにやってきて交換し、また自分の居所に帰るわけですが、やがて交換そのものを専門としてその場に住みつく者も出てくるようになる。人がもってきたものを買い、それを他の人に売るので、彼は、そのときまでに流通するようになっていた貨幣を仲立ちとして、この買いと売りをおこなうわけです。これが商人の原型であり、大げさに言えば商業資本の原型です。

商人が住みつくと、その生活を支えるいろいろな人もそこに住みつくようになりますから、そこに農民の集落とは違った性格の――つまり農業には従事しない人びとの――集落ができることになるでしょう。これがいわば交易都市の原型です。

宗教や国家からすると、人びとが勝手に動き回り、勝手なところにこうした交易都市のようなものをつくっていくのは、社会統合上望ましいことではないので、自分たちがもともとつくろうとしてきた支配の拠点にこれらの市場をできるだけ集め、管理すると同時に徴税の対象とするようになるのが当然でしょう。教社や王宮などのまえや周りにできる、日本語でいう門前町や城下町などが、交易都市を併合して複合的な都市となっていくのです。

都市はだから一般に、神殿や教会や寺院などの教社と、その威光を借りて現実の支配をおこなう王の宮殿と、多くのばあいその前の広場に展開される市場とを中心として、その周りに住みつく家臣団や商人や職人やその他の非農業従事者たちの住居からなり、それらを区画し人びとの往来を可能にする道路と、多くのばあいこれらの全体を囲って外敵などから防御する城壁などからなることになりました。英語の borough、フランス語の bourg、ドイツ語の Burg などはいずれももともとこうした城砦都市を意味し、中世いらいのもの

ですが、洋の東西を問わず古代から、都市とはだいたいこんなものであったことが、さまざまな遺跡や中国の北京など今でもその名残をとどめている都市にみることができます。都市の第一の特徴は、都市基盤すなわちインフラストラクチュアでした。特定の場所に教社や宮殿などの大きな建物や住居を集中して建て、多くの人びとが集中して住むためには、上水の導入や下水の処理を初めとする基本的な諸設備が必要となります。これらは、聖職者や王侯貴族に寄り添って生き、彼らに生活手段や生活上の便宜を提供してきた人びとによってつくりだされ、改善を施されつづけました。道路づくりなどのことを土木技術 civil engineering といい、こうしたさまざまな技術とその成果を文明 civilization というようになるのは、こうした経過に起因します。

そして第二に、都市の最大の特徴は、それが、こうした農業以外の仕事に従事して生きる居住者を生み出し、増やしつづけたことでした。教社や宮殿を建築するためにはそのための技術者や労働者が必要でしたし、それらの材料やその他の生活資料・生活手段を都市にもたらしたのは、輸送業者や商人たちであったはずです。とくに商人たちは、都市と農村のあいだばかりでなく、場合によっては他の社会とのあいだも行き来し、都市の建設と発展に大きく貢献しました。こうした宗教や軍事以外のことに携わる人びとこそ市民 citizen と呼ばれるようになる人びとの原型であり、彼らがつくりだしていく社会こそ市民社会 civil society と呼ばれる社会の原型であったのです。

4.6　都市を中心とする社会のシステム化

こうして、共同性と共同性との衝突をつうじて階層性を顕在化し、大きくなる共同性と高くなる階層性との矛盾を抱えながら膨張する階級社会は、社会統合の究極の装置としての都市を中心に、システム化することによって矛盾を回避するか、少なくとも緩和しつづけていくことになります。

都市という装置の開発は、第一に、社会に、都市と農村からなる、あるいは都市を中心にその周りに農村が広がる、という形態をもたらしました。デュルケムは、その社会形態学のなかで、社会には容積と動的密度がある、といっています。つまり、人をどれだけ住まわせられるかという観点からすると、都市は明らかに農村よりもはるかに容積が大きく、しかも同じくらいの容積の――同じくらいの人口の――都市を比較すると、例えば、門前町でもの静かな都市と商業都市でひっきりなしに人がゆきかう町とのあいだには、明らかに動的密度の差があるのです。こういう観点は、レヴィーストロースのいう「冷たい都市」と「熱い都市」の対照にもつながります。

都市という装置の発展は、しかし第二に、社会にそれまでになかった形態を与えたにとどまりませんでした。述べてきたように、都市は、社会統合の装置として宗教から相対的に自立した国家が、宗教の権威を借りながら、人間的自然の発露として猥雑さも孕みなが

ら蛇行する市場をおさえこむとともに利用しつつ、社会統合の実を上げようとして生み出したものでした。これはいわば、宗教という文化の威光を着つつ、政治が、市場として動き回る経済を制御し、有利に回転させるために、都市を中心にして社会を再編していったということで、ここにすでに、文化、政治、経済、社会という社会システムのもと――下位システム――が現れているのです。

宗教、国家、市場、都市の関連づけとそのあるパターンへの収斂、つまりシステム化していく社会が地球上のどこでもほぼ同じような構造をとり、その構造をとりながらどの社会システムもできるだけ膨張しようとして、結果としてたがいに接触したりしながら興亡をくり返したというのが、文明化して以後の人間社会の基本的な動きとなりました。これがいわゆる帝国の興亡であり、20 世紀の初めまでもつづいた人間社会の前半史なのです。

2500 年ほどまえのギリシアで、さまざまな事情が重なった結果、帝国の支配が弱くなって都市の国家としての自立が進み、市民たちが自治のために民主主義の原型を開発するとともに、哲学など、それと関連したさまざまな文化を創出し展開するという事態が発生しました。しかし、この早熟的な市民社会は、市民たちが帝国的な生活を捨てきれず、奴隷労働に依拠して消費的な生活を送り、せっかくの学問を生活の生産と結びつけてさらに発展させていくことができなかったばかりでなく、周辺の帝国と覇を競って争いつづけたりしつづけたために、けっきょくは地中海沿岸にそのご興った帝国に吸収されてしまいました。

西ヨーロッパで、帝国の支配が弱くなった諸都市から市民たちが成長し、ギリシア市民の遺産にも学びながら、ほんとうに帝国的システムを乗り越える新しい社会システム、すなわち市民社会のシステムをつくりはじめるのは、早くとっても 11-12 世紀からのことです。ですからつぎに私たちは、帝国というシステムがどんなものであったのか、文明化の初期から誕生していた市民たちがどうしてそれを克服して、自分たちの社会システムを立ち上げることができなかったのか、をみておかなければならないのです。

4　一次システムとしての帝国

4.1　帝国の意味

帝国は、共同性と階層性の相克、およびそこから発する平等感と不平等感との矛盾を緩和しようとして、宗教、国家、市場、都市という装置を重層的に用いてつくられる社会システムであるといいましたが、帝国という言葉の意味については解説が必要です。

この言葉は、昔からかなり多義的に用いられてきましたが、とくに 2000 年にマイケル・ハートとアントニオ・ネグリが『帝国』という本を出して有名になっていらい、彼らの真意とはあまり関係なく、ますます多義的に用いられるようになりました。いちばん多いの

は、古代のローマ帝国を念頭において、アメリカが帝国のようにふるまっているといったり、中国も伝統的に中華帝国としてふるまってきたので、アメリカに対抗してこんごますます帝国化していくであろう、といたったりするような場合の使い方です。

ハートとネグリの帝国論の真意は、市民の視点からの現代社会分析にあたって重大な問題なので、次稿（**後記**参照）の冒頭で取りあげることにします。ここではまず、古代ローマ帝国や中華帝国を念頭において、アメリカや中国のような現代の大国のふるまいを批判するために、帝国の語を比喩的に用いるのはしかたないとしても、その歴史的社会科学的な意味は正確に理解しておかなければならない、ということを肝に銘じておきましょう。

帝国はほんらい上に定義したような社会システムで、人間の社会が歴史上最初にとることになったシステム性の形態と構造です。この意味で私は、これを人間社会の一次システムと呼びたいと思いますが、システムという言葉をこのように人間社会の高度で複雑なまとまり――統合形態――という意味で用いるならば、人類の社会史にはこれまで二つのシステムしかないのです。帝国と市民社会。私は、この 4 で帝国の特徴を明らかにし、つぎの 5 で、市民社会がそれを完全に超克する二次システムであることを明らかにするつもりですが、この二つの社会システムの交代過程、つまり帝国から市民社会への移行過程で、さまざまな「帝国」的現象が生じたし、今でも生じています。

それが帝国主義です。西ヨーロッパ諸国が大航海に乗り出し、世界のほとんどを征服して近代社会の基礎をつくっていったとき、これら諸国の背景にはすでに市民および市民社会の台頭があったのですが、市民と市民社会はまだ生成の途上だったので、多くのばあい王が先頭に立ち、王たちはそれまでの帝国のイメージにとらわれながら征服を進めました。こうして、ポルトガル「帝国」、イスパニア（スペイン）「帝国」、オランダ「帝国」、イギリス「帝国」が生まれました。これらのうちオランダあたりから市民性が強くなり、イギリスはついに 17 世紀のピューリタン革命と名誉革命とをつうじて、基本的に市民社会を基礎とする「帝国」となるのですが、それでも 18 世紀から 19 世紀にかけて大イギリス（大英）「帝国」としてふるまいつづけました。

これらの「帝国」に反発し、最初に植民地の独立を果たしたのはアメリカで、事実上近代最初の共和国となったアメリカは、そのごスペインやポルトガルからの中南米諸国の独立を直接間接に支援しました。しかし、ヨーロッパ大陸では、イギリスに反発して大革命後のフランスも「帝国」となり、遅れじと立ち上がったドイツも「帝国」となったし、アジアでは、かろうじて植民地化をまぬがれた日本も「帝国」――「大日本帝国」――となって、19 世紀末に米西戦争などをつうじて「帝国」化したアメリカもこれに加わり、これら「帝国」としてふるまうブルジュワ（資本主義）諸国のあいだで、幸徳秋水やホブスンやレーニンが批判したような帝国主義と帝国主義戦争が展開されたのです。

こうした市民社会生成途上の「帝国」的現象と、もともとの帝国とは、歴史的社会科学

的にははっきりと区別されなくてはなりません。では、帝国とはもともとどんな社会システムだったのでしょうか？

4.2　宗教の諸形態

文明の生成とともに形成されはじめた帝国の最初の装置は、なんといっても宗教でした。すでにみたように、言語その他を用いるシンボリズムを身に着けていた人びとにとって、膨張しながら矛盾を深刻化させていく社会と世界のなかで生きていくすべは、それらについて、物語をつくり、語りあいながら納得していくことをつうじていがいありえなかったでしょう。これらの物語に、個々の人の生や老いや病や死など、カール・ヤスパースのいう人間の限界状況についての、さまざまな感動的物語が織り込まれていればなおさらのことです。

過去のヨーロッパの学者には、反発しながらでも、キリスト教という一神教が最高の宗教という考えが無意識のうちにもあって、例えばコントのそれのように、人は拝物教から多神教をへて一神教に進化してきたのだというような説が唱えられました。拝物教の典型は、森羅万象あらゆるものに魂が宿るとするアニミズムのようなものでしょうが、これはこんにち、人間中心の世界観を排し、人間をその一環とみて自然界の相互依存や循環を大切にしようとする環境思想との関連で、あらためて高く評価されたりしています。

多くの社会では、社会分業が進み、社会と世界の分節化が進んでくるにつれて、さまざまな領域をつかさどる神がみが生み出され、それらを統括する最高神のもとにおける神がみの秩序や争いなどが語られる、多神教が生み出されていきました。神がみの秩序や争いのうちに、人間世界のさまざまな出来事や人間のさまざまな願望などが象徴的に表現されていく、つまりシンボライズされていくのは、人間社会のシステム化との関連でもきわめて自然なことです。これらの多様性をすべて否定し、唯一の超越神による世界の創造やそのなかにおける人間の特殊な地位と役割を主張する一神教は、風土論などの推定を援用すれば、砂漠のような極度に厳しい環境のもとで、つねに生か死かを意識しつつ生きざるをえなかった人びとによってのみ創造されえたのかもしれません。いずれにしても、ユダヤ教やキリスト教やイスラームは、人間社会史のあらゆる展開可能性が参照可能となってきたこんにちでは、相互に、また他の宗教その他にたいして、ますます寛容にならざるをえないでしょう。

インドや中国では、多神教をふまえて、あるいはそれらのかたわらに、大宇宙すなわち梵（ブラフマン）や天と、かりそめに生きるにすぎない人間の我執（アートマン）や達観とを対照する、いわば無神教とも呼ぶべき宗教あるいは宗教的世界観が生まれました。生老病死の輪廻から解脱しようとする仏教も一つの生き方ですが、大自然に生まれて生きるために働き、老いて楽しみを知り、死に憩うのが人生なのだから、生まれるのも死ぬのも

善いのだとする老荘の考え方も、アッケラカンとしていてかえって私たちに勇気を与えるものではないでしょうか。

仏教にいう仏は、ほんらい人が修行を重ねて到達する身体の状態であり、あらゆる欲望を制御してたんに生きることに集中し、余力のすべてを煩悩に惑う人びとの救済に捧げて、時がきたら恬淡と死ぬという行為の連鎖であったはずです。しかし、とくに大乗のルートで、諸仏は神がみのように序列化されて軍隊もどきとなり、権力者に利用されて支配の道具となりました。こうした動きへの批判から生まれた禅のような根源回帰も、日本の鎌倉時代以降に生じたさまざまな宗教改革も、権力と闘いながら、いつかまた権力と妥協して支配のイデオロギーと組織として利用されていったのです。

4.3　特異点としての皇帝の身体

こうした諸宗教に共通していたのは、これが宗教の定義でもあるわけですが、超越的なもの、すなわち人間が直接間接に経験しえないものを想定し、それらが経験的世界を支配しているというシンボリズムでした。人間社会の、まだよく自然とそれ自身を制御しえない弱さが、その背後にあったはずです。

こうしたシンボリズムをつうじて経験世界としての人間社会を統合していくために、人間社会は、それを構成する諸身体のなかから特定の身体を選び出し、それを、経験世界と超越的なものとの境界線に位置する特異点に、いわばせり上げていくことを必要としました。この身体が王と呼ばれる特異身体で、その最初のせり上げ方はいろいろとあったはずですが、諸社会が接触しあって膨張のダイナミズムに入って以降の、王の王のせり上げ方は、基本的に 2.4 に述べたようなものであったはずです。神あるいは超越者の化身であったり申し子であったりするこの王は、卑弥呼の例にそくして述べたように最初は宗教者それ自身であったかもしれないのですが、しだいに独立した存在となっていきました。

膨張する社会は、この王をかつぎ上げて、軍隊を編成し、それを維持するために徴税の仕組みをつくり、それが生み出す組織そのものの管理と社会全般の管理とを結びつけて遂行していくために、それに適した人びとを選んで家産官僚制を作り上げていきます。王はもちろん、軍隊の長であるとともに家産官僚制の長です。宗教から相対的に独立して以後も、彼はその支配の正統性を確保するために宗教の権威を必要としますが、聖職者はむしろ彼に仕える形になり、兵士と官僚は相互に独立であったりたがいに兼ねあったりしながら、王侯貴族の身分という階層を形成していくのです。

こうして生成した国家が、農業を基礎として独自な動きをつづけようとする市場を、灌漑治水などによる農業の規制や都市への市場集中などによって統制し、都市を中心に農村の広がる形態のうえに、文化的政治的経済的社会的に重層化する構造を載せた、王国のシステムをつくりあげていったのです。そして、これらの王国の衝突と併合がつづくと、王

の王のせり上げあいから、現実世界から離れることはないにしても、社会システムが大きくなるだけにそれだけ超越性の度を増した、王の王の、、、王としての皇帝が誕生することになりました。

皇帝が、ますます度を高める超越性と逃れられない現実性とを媒介するために、巨大なハーレムをつくったり、さまざまな意味で暴君化したりしたことについては、いろいろに語られてきているとおりです。皇帝には、こうした内的な苦悩とともに、帝国――すなわちその至上命令 Imperium が行き届かなければならない範囲――に自らを知らしめねばならないという、いわば外的な苦悩がありました。古代エジプトなどでは、そのために王は、そこから威光をえていた宗教の神がみ、つまりオシリスやイシスの像を各地に建て、それにたいする崇拝をつうじて自らへの忠誠をえようとしていたようです。それがやがて、キリスト教の威光を借りようとした帝国ではキリストの磔刑像を掲げた教会となり、仏教に威光を借りようとした帝国では巨大な仏像や寺院、などなどとなっていったのでしょう。

帝国主義は、形成途上の不完全な市民社会が、帝国のやり方をまねようとして出てきたものだといいましたが、例えば日本「帝国」の形成期に、天皇がしきりに行幸をおこないながら全国各地に「御真影」をばらまいたり、社会主義の理想に反して巨大な社会帝国主義となったソ連で、国内各地ばかりでなく東欧などの衛星諸国にも、レーニンやスターリンの巨大な像がぞくぞくと建てられたりしたことなどが、関連して思い起こされます。

4.4　普遍宗教と帝国の興亡

帝国は、こうした特異身体としての皇帝を担ぎながら、宗教の威光を借りてその理想を世界に広めようとし、可能なかぎり膨張しようとして興亡をくり返しました。紀元前 5 世紀からしばらくの間はヤスパースのいう「枢軸時代」であり、古代のギリシアでは哲学が、イスラエルではユダヤ教が、インドではウパニシャッド哲学や仏教が、中国では儒教や道教が形成されました。ウェーバーのいう普遍宗教の出現であり、文明帝国の大成と世界制覇への意思表明です。

古代ギリシアは都市国家でしたが、その文明は地中海沿岸東寄り一帯に広がってヘレニズムとなり、それを基礎に、古代ギリシアの宿敵ペルシア帝国を滅ぼして、インド外辺にまでおよぶ大帝国を築いたのは、アレクサンドロス大王のマケドニア王国 (334-324bc) でした。アレクサンドロスが古代ギリシア哲学の大成者アリストテレスを師とし、生来の奴隷を容認するその哲学の批判者で、「元祖世界市民」と呼ばれるディオゲネスまでも保護しようとしたことは、有名です。しかしこの帝国は、大王の急逝によって分裂と衰退をはじめ、やがて古代ローマに吸収されていきました。

アレクサンドロスの遠征の直後、インドのガンジス河下流域マガダ国から起こったマウリア朝 (317-180bc) は、アショーカ王 (268-232bc) の時代にパキスタンからインドア亜大陸

にかけての地域をほぼ統一しますが、アショーカ王はこの過程での残虐な殺戮の連続を深く反省して仏教に帰依し、以後はダルマ（法）による統治をめざすようになったといわれています。しかし、この帝国もその後は安定せず、分裂・縮小をくり返して、やがて消滅していきました。仏教はその後、個人の悟りをめざす上座部仏教――ウェーバーのいう達人宗教――として主としてインドの南から東南アジアに伝わる一方、一般民衆の救済をめざす大乗仏教――ウェーバーのいう大衆宗教――として中央アジアや東アジアに伝わり、インド亜大陸ではヒンドゥー教に吸収されつつ、一部は密教として中国、日本、チベットなどに伝わっていきます。

インドでアショーカ王の治世が終わってまもなく、中国では最初の統一帝国秦 (221-206bc) が起こされ、これを嚆矢としてその後、漢 (202bc-8ad)、後漢 (25-220)、三国時代をへて隨 (581-618)、唐 (618-907)、宋 (960-1127) とつづく大帝国の歴史が開始されました。帝国形成の過激さに一部の儒者などが抵抗したため、秦の始皇帝が、いわゆる焚書坑儒によって、春秋戦国以前からの儒教の古典や儒者たちを弾圧したことは有名です。しかし漢以降は、帝国は一般に古典を整理編纂したり、それらをもとに新たな学問を興したりしつつ、道教や仏教も取り入れながら内部の統治と外部侵出のイデオロギーを練り上げていくことになりました。

他方、地中海沿岸では、紀元前後をつうじてローマ帝国 (27bc-395) が形成され、最初はギリシア文化を受け継ぎつつ、その後の法典のモデルとされるローマ法をつくって統治を維持しようとしますが、帝国発足直後に中東でユダヤ教の宗教改革をつうじて形成されたキリスト教が、四福音書に描かれた神秘的ながらも人間的な物語をつうじて急速に人びとのあいだに浸透し、4 世紀にはついに公認され (313)、国教化されます (380)。ローマ帝国はその後東西に分裂し、西ローマ帝国は 417 年には滅亡しますが、東ローマ帝国は 1453 年までつづき、いわゆるギリシア正教の伝統をロシアなどに伝えていきました。

4.5　帝国の興亡から最終崩壊へ

7 世紀に入ると、ユダヤ教やキリスト教など一神教の伝統をもつ中東で、旧約聖書のと同じ神話をもとにした新しい宗教として、イスラームが起こります。教典のクルアーンは、唯一不二のアッラーフが、最後の預言者ムハンマドの口を借りて語ったものとされ、信徒に呼びかける形で書かれています。聖処女マリアが神の子を懐胎してキリストを生んだというような、人間世界では通常はありえない話を介してではなく、直接にアッラーフと個々の信者がつながるため、明快な一神教として人びとの心をとらえました。砂漠の多い地域で、隊商のような移動性の高い経済行為をしていた人びとを中心に広がり、610 年の布教開始から、メッカからメディナに聖地を移動した 622 年のヒジュラをへて、630 年にはアラビア半島を統一するにいたります。

その後、ムハンマドの死後、後継指導者となった4人のカリフによるイスラーム帝国の拡大が続きましたが、4代目アリーが暗殺されたあと、その政敵であったムアーウィアがみずからカリフに就任し、カリフ位を世襲化してウマイヤ朝(661-750)を起こします。この王朝の正統性を承認したスンナ（慣習）派と、アリーの正統な後継を自負するシーア派との対立が、ここから生まれました。ウマイヤ朝では8世紀半ばにアッバース家による革命が起こり、バグダードを首都として中央アジア、インドにまで版図を広げた巨大な帝国アッバース朝(750-1258)が起こります。しかし、アンダルス（スペイン）は後ウマイヤ朝として最初からこれに乗らず、9世紀以降は地方がしだいに自立しはじめ、10世紀には北アフリカのファーティマ朝がアリーの後継（シーア派）を奉じて対抗し、イスラーム帝国は分裂時代に入ります。バグダードでは10世紀半ばにシーア派王朝ブワイフ朝によって支配権が握られ、11世紀半ばにはそれを滅ぼしたセルジューク朝がカリフにスルターンの称号を与えられて支配権を握りましたが、その衰亡後13世紀半ばに、形骸化していたアッバース朝はモンゴル帝国に滅ぼされました。

モンゴル帝国は、中央アジア大草原の遊牧民族が、素朴な天信仰を基礎とするシャーマニズムにもとづき、十人隊、百人隊、千人隊という社会単位をふまえて築き上げた、史上最大の世界帝国です。最盛期には地球上の陸地の約25%を支配し、1億人を超える人口を配下に置きました。普遍宗教をもっていたわけでもなく、高度な文明や複雑な社会組織をもっていたわけでもないモンゴル社会が、この驚異を成し遂げたのは、社会単位ごとに生産力と武力をまるごと持ったまま縦横に移動したそのスピードによって、13世紀のユーラシア大陸に広がっていた諸帝国と諸社会の虚を突いたからであったでしょう。

この帝国はやがて中国を征服して元朝(1271-1386)となり、その後、明(1368-1644)をへて清――1616年に後金として起こり、36年に改称して、明滅亡後に全土を支配――につながる中華帝国の歴史の、いわば後半部にはずみをつけました。清の歴史はその後延々と20世紀にまでつづき、孫文の辛亥革命によってようやく1912年に最終崩壊するのです。他方西では、13世紀末に東ローマ帝国とルーム・セルジューク朝との国境地帯から現れたオスマン君候国が、14世紀以降急速に成長してオスマン帝国となり、15世紀半ばには東ローマ帝国を滅ぼし、16世紀の最盛期には中央ヨーロッパから北アフリカに広がる大帝国となっていました。オスマン朝の宗教は基本的にはイスラームでしたが、イスタンブールを拠点として東西にわたる広大な地域を支配し、ヨーロッパの近代化に蚕食されながらも、これも延々と20世紀まで存続し、ようやく第一次世界大戦後の1922年に最終崩壊しました。

4.6　膨張の必然性と補給の限界

こうみてくると、帝国はすべてできるかぎり膨張しようとし、しかしそのエネルギーと資源がいつまでもつづかず、やがてはすべて崩壊していったことがわかります。

帝国はなぜできるかぎり膨張しようとしたか。それは明らかに、その宗教が普遍的であればあるほど多くの――というよりも、すべての――人間の救済を志向したからでしょう。そんなのはたんなる理念であって、じっさいにはかぎりなき征服の野望が働いていたのだ、といいたければ、それはそのとおりです。人間のやることはすべて、ウェーバー流にいえば理念 Idee と利害関心 Interesse にもとづくものであり、マルクス流にいえばイデオロギー Ideologie にもとづくものです。しかし、唯物論に慣らされた現代人と違って、古代的――なんらかの超越者を信じる――人間にとっては、宗教はそのまま理想でもあり現実でもあったし、いまでもあるのだ、ということは認めておかなければならないでしょう。

では、帝国はなぜいつまでもつづかず、すべて崩壊したのか。これは明らかに、帝国の生産力基盤が基本的には農業であり、余剰をもって武器と装備をつくり、軍隊を派遣したとしても、それに補給をつづけるには限界があったからでしょう。特異身体としての皇帝がその軍隊と家産官僚制を維持するためには、帝国が大きくなればなるほど膨大な資源を必要とします。農業には限界があり、皇帝が職人や商人を動員して経済や市場の規模を拡大し、活性化しようとしても、あくまでも農業が基本の生産様式には越えられない線があったのです。

この点、明快な天信仰と遊牧生産力をもとに史上最大の帝国を築き上げたモンゴルの業績は、あらためて驚くべきものです。明快な天信仰が征服の一点に人びとの意識を集中し、それに向けて人と家畜と武器と住居――つまり武力を含む生産力の総体――が、千人隊のような社会単位で縦横無尽に驚異的なスピードで移動したことがその原因と思われますが、こうしたことは 13 世紀のユーラシア大陸でしか起こりえませんでした。現代では、コンピュータの発達によって、小さな単位で人びとが素早く移動しつつ経済活動やその他の社会活動を展開することが可能になっていて、「新しい遊牧民（ネオノマド）」の出現だとかいわれていますが、これはまた別の話でしょう。

帝国はこうして、世界中に大きな都市をつくり、高度な文明を発達させましたが、その展開には限度がありました。念のためにここで、これまでは視野に入れてこなかったアメリカ大陸にも、現在発掘研究中の古いものを措くとしても、マヤ（古典期 300-900）、アステカ (14c-1521)、インカ (13c-1533) のような帝国の興亡があったことに、言及しておきましょう。これらは、帝国の歴史が人類史上に普遍的なものであることを示していると同時に、それほど強くない帝国が、曲がりなりにも市民の台頭を背景にした「帝国」主義的侵略軍のまえには、あまりにももろかったことを示しています。そして同様のことは、これまでみてきたように、もっと古い歴史をもち、もっと強力でもあったアジアの諸帝国にも、

もっと時間をかけてではあれ起こったことなのです。

では、けっきょく帝国の最大の弱点はどこにあったのか。いうまでもなくそれは、諸帝国が、みずからつくった大きな都市の市民たちに行動の自由を与え、彼らの知恵とエネルギーを引き出して社会を活性化させることができなかったところにあったのです。そして、じっさいにそうしたことが起こった過程を追究していくと、私たちは不可避的に人類史上第二の社会システムとしての市民社会に行きつくことになるのです。

5　二次システムとしての市民社会

5.1　主体としての市民

これまでにみた諸帝国の諸都市の市民はもとより、古代ギリシアの諸都市の市民とも異なる、まったく新しい市民が登場してくる過程については別稿 I -2 でみました。新しい市民の特徴は、なんといっても、自らを、世界解釈の、自然理解の、そして社会形成の、主体として立てたことでしょう。

本稿 1 で私たちは、市民がどのようにして自らの社会をとらえることができるのかをみました。そのときに指摘したように、人間を最初に世界把握の主体として立てたのは、デカルトのコギト（「われ思う、ゆえにわれあり」）でした。ただこれにはまだいろいろな不十分さがあったので、その後のカントやフッサールやその影響を受けた人びとの知的努力に学びながら、私たちはここまで、社会をとらえようとしてきました。この流れと並行して自然理解について人間を主体として立てていったのは、ベーコンの実験論やニュートンやライプニッツの微積分学をふまえた、万有引力論とそれをふまえた古典力学等々の形成であり、19 世紀の末以降は相対論や量子論を柱にした新しいパラダイムの展開でした。

社会形成については、ピューリタン革命を目撃したホッブスが、帝国や王国が滅ぼされるか倒されれば、あたりは「万人の万人にたいする戦い」の自然状態となること、それを避けるためには強大な力に主権をゆだね、レヴァイアサンのような国家をつくらねばならないこと、これがうまく行かないと国家は支配そのものが暴力にほかならないようなビヒモスにならざるをえないこと、を指摘しました。その後の名誉革命を目撃したロックが、王制と妥協しながらも、市民が、議会と議院内閣制によって、自らの労働にもとづく正当な所有（財産）を守れるのであれば、それが市民の政府であり国家であるといえることを主張したのは、不完全ながらも一歩前進でした。

1755 年にポルトガルのリスボンで大地震があり、津波と火災によって大きな被害が出、ヨーロッパの広い範囲でも揺れを感じたことから、ルソーはその影響もあって、人間は、もともとそのなかにあった自然に帰るべきだ、と主張するようになったといわれています。その延長上でルソーは、不平等が発生する以前の自然状態を理想とみなし、社会を形成す

るのであれば人びとの「一般意志」にしたがってなされるべきだ、と主張しました。しかしルソーのこの考え方は、フランス革命時のジャコバン派からロシア革命時のボルシェヴィキその他にいたるまで、少数の前衛による人民意志の独断的推測とそれにもとづく独裁に利用されたのが現実なので、今日では基本的に採用されえないというべきでしょう。

こうして、市民を社会形成の主体として立て、それが現実となるようにたゆまぬ努力をつづけてきたのは、けっきょく、19 世紀イギリスのチャーティスト運動いらいの普通選挙運動家たち、普通選挙の実現をめざして運動した労働者、女性、少数民族その他の人びとであり、この人びとの運動の正当性を理論化し、擁護してきた多くの政治理論家や社会理論家なのです。この点にかんして、優れた資本主義批判家たちや社会主義理論家たちにどのような弱点があったか、植民地解放に取り組んだ理論家たちや実践家たちはどんな考えをもっていたかなどについては、別稿 3,4,5 で述べました。

別稿 6 で述べたようにほんとうの市民社会はまだこれからなのですが、これらすべてをふまえて、市民社会とは、ではどんな社会システムなのか、を確認してみましょう。それは、先取りしていっておけば、社会の平等と不平等との矛盾を緩和し、社会をシステム化していく装置としての宗教、国家、市場、都市の一つひとつについて、帝国的なものを徹底して乗り越えていくことにほかならなかったし、今もなおほかならないのです。

5.2　宗教の内面化から無神論へ：科学技術の発達

社会形成のうえで、とりわけ帝国形成のうえで、宗教がいかに重要な役割を果たしたかを述べましたが、新しい市民――以後はたんに市民と呼びます――の最初の仕事は、この宗教から自らを解放することでした。

西ヨーロッパでは、西ローマ帝国の滅亡後、強力な帝国が形成されず、キリスト教がカトリックとして一元的な支配をめざしたものの、十字軍などの失敗でかえって批判を呼び起こし、各地に宗教改革の動きが起こって、16 世紀以降、新教すなわちプロテスタンティズムの流れが有力となったことは、良く知られていることです。プロテスタントは、教皇を頂点とするローマ・カトリックの聖職者組織が、免罪符の販売で私腹を肥やすなどの腐敗をはびこらせていることに抗議（プロテスト）し、聖書の内容に立ち帰ってほんらいの教えを呼び戻すよう訴えました。

カトリックの巨大組織という外面的なものを離れ、信者各人の内面にキリストの教えにたいする信仰を確立しようとしたこの動きが、人間を個人という主体として立てることに大きく貢献したことについては、ウェーバーをはじめ多くの人びとが指摘してきています。この宗教改革にたいしてカトリックは対抗宗教改革を開始し、組織を再編しながら信者の信頼を取り戻そうとしていきますが、17 世紀の、どちらかといえばカトリックの強いフランスでおこなわれた、デカルトの方法的懐疑とコギトの定立は、個人を主体として立てる

ことの、いわば徹底して合理的なヴァージョンでした。

デカルトの思想を同時代のブレーズ・パスカルが、デカルトはコギトを立てたあと、世界を建て直していく出発点として完全無欠の神――だから神が存在しないなどということはありえない、というのがデカルトの有名な「証明」です――に言及するが、そのごはもう神を必要としていないと批判しますが、おそらくはデカルトの意図をも越えて、近代思想はパスカルのいったとおりに展開していきます。デカルトはまた幾何学と代数学とを結びつけた解析幾何学の創始者としても有名ですが、コギトが座標系を立て、そこに微積分学などを用いて現実世界の動きを投影しはじめれば、もはや神がいようがいまいが、合理的な自然理解すなわち自然科学はおしとどめようもなく発達しはじめるのです。

いわゆる科学技術革命論が主張してきたように、科学と技術とは、その基本発想からしても、また歴史的にみても、ほんらい別べつのものですが、資本主義の発展とりわけ産業革命の進展にともなってしだいに融合するようになっていきました。神話や宗教にもとづく非合理的な世界認識のもとでは、雨乞いや病気治療などのために魔術がおこなわれていたわけですが、近代の市民は、科学技術にもとづいて世界を解釈し、自然から人間身体、さらには社会や文化から人間精神の内面までをも、変えていこうとするようになります。

こうして宗教は、合理的世界解釈のもとでは根拠がないだけでなく、人びとの現実認識を妨げる有害なもの、さらにいえば人びとを現実から逃避させるアヘンのようなもの、であるとして、無神論が登場してきました。無神論につながる多くの哲学書や文学・芸術作品などは、今日まで市民の文化の重要部分を構成するものとして比重を増しつづけてきています。しかし同時に、科学技術には、デュルケムが宗教の重要な機能とみなした社会統合の働きが少なくとも明示的にあるとはいえないこと、ヤスパースが人間の限界状況とした生老病死などの不可避性についても人を納得させるものがあるとはいえないこと、そして何よりも現実として、今日にいたるまで世界中の多くの人びとがなおなんらかの宗教によって生きていること、なども認められなければならず、この点でも、市民の課題はまだまだ多く残されているといわなければならないでしょう。

5.3　国民国家の形成と民主主義の普及

宗教から自らを解放しつつ主体化する市民たちは、新しい共同性として国民（ネーション）を立ち上げ、そのうえに市民たち自身の国家を立てようとします。いわゆる国民国家（ネーション・ステート）の形成です。そのために市民たちは、国家を宗教から分離しようとします。いわゆる政教分離です。これは多くの国で今でもさまざまな程度に不完全ですが、原則としては否定できなくなってきているのが趨勢でしょう。それよりも、こんどは国民それ自体が宗教まがいのものの対象になり、ナショナリズムという深刻な問題を引き起こすことになりますが、それについては 1.5 や 2.5 でふれましたし、この章の最後で

もふれることになるでしょう。

市民たちは国家を自分たちのものとするために、議会を改革するか、それがない場合には新しくつくります。そしてそこで、憲法をつくり、政治の基礎とします。いわゆる立憲主義です。憲法はふつう、人権宣言と国家形態と政治の基本手続きを述べた部分からなります。人権宣言としては、イギリスのマグナ・カルタや権利の章典、アメリカの独立宣言と憲法修正 10 ヵ条、フランスの人と市民の権利宣言などがもとで、多くの国の憲法はこれらをもとにつくられていくことになります。国家形態としては、（立法）議会を一院制にするか、二院制にするか、行政の長を議会が選ぶ議院内閣制にするか、市民たちが直接選挙する大統領制にするか、などで差が出てきますが、司法の独立を認めるいわゆる三権分立が基本とされてきています。議院内閣制がいいのか大統領制がいいのか、司法の独立といってもその長を行政の長が指名する場合が多く、それで独立が保障されるのか、などの問題がありますが、市民的国家の基本はこのようなものだといっていいでしょう。

軍についていえば、アメリカやフランスの例や多くの民族解放運動の例のように、革命の過程で市民たちが自ら組織した場合が多く、それが基本というべきでしょう。ドイツや日本の例のように皇帝や天皇を立てて組織された軍は、そのご深刻な問題を起こしています。民族解放運動の例でも、軍の指導者が独裁者などになって支配をつづける場合には、そのごの市民社会化が進まず、今日でも問題になっています。これらの経験をふまえて、市民的国家の軍は、市民たちの意志のもとづいて組織され、文民統制（シヴィリアン・コントロール）のもとに置かれるのが原則です。

市民の議会と首相あるいは大統領のもと、官僚制は、位階制（ハイアラーキー）的に組織された官僚の、それぞれの位置における地位と役割（権限と責任）を明確化した、合理的なものとなりました。イギリスの例のように、市民革命が王制と妥協して立憲君主制となり、古くからの家産官僚制を引きついだ場合には、その合理化のために長年におよぶ多大な努力が必要とされ、ジェレミー・ベンサムの功利主義などはじつはそのために生まれたのだともいわれています。しかし、アメリカの例のように基本的に新しく組織された官僚制でも、特定地位にともなう権限が既得権益化したり、役割分担意識の過剰からたらい回しなどの無責任が生じたりして、ウェーバーが道を拓いたような官僚制批判の必要性は今でも衰えていません。市民社会では官僚自身が市民なので、外部からの批判ばかりでなく、市民たちの、内部告発などを含む不断の改革努力が必要でしょう。

市民的国家は、さらに長い眼でみてそれ自身を維持するため、初等、中等、高等と積み上がる教育制度を形成し、発達する科学技術をもとに次世代を教育しようとします。これには国家が資本の意を受けて労働力を養成するという意味もありますが、そればかりではありません。国家は、国民を統合し、時として軍事力を用いてでもそれを維持、場合によっては拡大するために、宗教教育が駄目ならばなんらかの道徳教育をおこなうべきだという

議論が、これまでいろいろな国でくり返しおこなわれてきました。しかし、まさに教育そのものの普及をつうじて、そもそも国民国家同士の戦争は愚かなのではないか、いやそもそも人類は戦争という手段でもめごとを解決するのをやめなければならないのではないか、という議論が広がってきているのが現実でしょう。この問題を、私たちはこの章の最後で議論しなければなりません。

5.4　普遍的市場化と止めどない産業革命

市民たちは、宗教から自らを解放し、自分たちの国家を建設しようとするまえから、市場を拡大する経済行為を活発化しつづけていました。もともと市民は都市で商業や手工業にたずさわる人びとだったわけですから、これは当然のことです。だから、まず市民たちの市場拡大活動を取りあげ、そのうえに宗教からの解放や国民国家建設を乗せていくべきだという考え方にも、根拠がないわけではありません。そのほうが唯物論的だということもできます。しかし私たちはあえて、帝国形成の順番どおりに、市民たちが宗教を否定し、それに権威づけられた国家を否定して、新しい国家を建設していく過程をみてきました。これにはいくつかの理由があります。

第一に、市場拡大のうえに市民たちがルネサンスや宗教改革を展開していたのが事実であるとしても、市民たちをバックアップして大航海をおこなわせ、アメリカ大陸やアジアに市場を拡大しようとしていったのは、最初はポルトガルやスペインの王室でした。しかも彼らは、アメリカでははなはだ乱暴なやり方で先住民の文明帝国を破壊し、アジアでは、さすがにすぐにとはいかなかったにしても、既存の文明帝国を浸食し、可能なところから植民地化していきました。これに加わったオランダやイギリスやフランスの場合は、しだいに市民の主導性が強くなっていったにしても、征服と植民地化のやり方は基本的に暴力的なものであり、けっして市場そのものの論理に従ったものなどではありませんでした。西ヨーロッパにおける資本の原始的蓄積と市場形成が、アメリカやアジアから略奪してきた富の集積がなければありえなかったろうことは、今日では常識です。

第二に、市民革命と初期産業資本の形成に先行したイギリスが、植民地の大半を手中にしたうえで18世紀半ばから世界に先駆けて産業革命に入り、「世界の工場」になっていったことは事実ですが、これも、王制と妥協したイギリス市民国家の「大英帝国」的ふるまいを前面に立てることなしには、ありえないことでした。産業革命の開始をみてアダム・スミスは、「見えざる手」を信頼して自由貿易を世界に広めるべきことを訴え、これにたいして、市民革命に遅れをとったフランスのケネーは、農業を中心に経済全体の相互連関と循環を重視すべきことを主張し、さらに近代国家建設に遅れをとったドイツのフリードリッヒ・リストは、スミスの「万民経済」と「交換価値」にたいして「国民経済」と「生産力」を対置しますが、こうした論争もけっきょくは西ヨーロッパという「コップのなか

の嵐」にすぎませんでした。西ヨーロッパから巻き起こった普遍的市場化と止めどない産業革命の動きは、植民地化に抵抗していたアジアの帝国や、イギリスの植民地状態から独立したアメリカ合州国も含めて、世界全体を巻き込んでいったのです。

資本主義的な世界市場の形成と産業革命の波及をつうじて、市民社会の生産様式は一変しました。土地と気候に拘束される農業や、価値そのものを生産しない商業とちがって、工場制大工業を中心とする諸産業は、有利な土地に工場や事務所を建てて、商品化された労働力を好きなだけ雇い、あらゆるものをほとんど無制限に生産することができるようになりました。生産力の無限増大の可能性が出てきました。帝国はその使命にしたがって無限に膨張しようとするも、その補給力に限界があり、必ずどこかで衰退していったのをみましたが、市民社会の経済には原則としてこのような限界がなくなったのです。ここに、市民社会を第二次社会システムと呼ぶ、もっともはっきりした理由があるといえるかもしれません。

資本主義は、国民として広げられた共同性のうえに、資本家階級（ブルジュワジー）と労働者階級（プロレタリアート）との対立を生み出しました。この意味では市民社会も、国民の範囲での、市民の平等と階級的不平等との矛盾への対処という、社会膨張のダイナミズムに突き動かされて展開しはじめました。ブルジュワジーとプロレタリアートとの階級対立の要に、資本による労働力の搾取――表面上は合法的な雇用契約の裏側で、資本が生み出される剰余価値の全部を取得してしまう――があるという理論が現れ、劣悪な労働条件に抵抗して闘っていた労働運動を活性化し、その延長上にプロレタリアートによる国家権力の奪取と新国家建設という展望が示されて、19 世紀から 20 世紀にかけての世界史を大きく動かしたことについては、別稿でみたとおりです。これにたいして他方では、労働者――そして女性や少数民族など――も対等に政治に参加させるべきだという普通選挙運動が展開され、けっきょくはこちらの線で、市民社会が、階級社会としてばかりでなく、各人にさまざまな地位と役割を割り振るシステムとしても発展してきていることをも、別稿でみました。

市民社会は、科学技術の発達と国民国家運営をめぐる民主主義という理念のもとで、現実にはこのような社会システムとして展開してきているというのが実態でしょう。

5.5　巨大化する都市と市民の疎外――マルチチュードとサバルタン――

市民社会は、社会形態としては、市民すなわち都市の民の社会ですから、都市の形態を社会全体に広げたものです。もちろん、農村がなくなるわけではありませんが、都市が拡大していくうえに農村も都市化してくるので、社会全体が都市のようになるのは、多くの先進社会を見ても明らかでしょう。社会学のシカゴ学派が都市的生活様式という言葉を広めましたが、市民社会とは都市的生活様式が全体に行き渡る社会だということもできます。

都市および都市的生活様式の特徴は、道路、上下水道、ガス、電気、公共交通機関、電話など通信網、などのインフラストラクチュアが整備され、どこに行っても同じような生活ができるようになることです。その前提として、これらのインフラが整備されていれば、どこにでも政府機関ばかりでなく民間企業などが立地するはずで、したがって雇用機会があるはずだ、ということも含まれるでしょう。しかしじっさいには、どの国でもインフラの均等な整備のためには時間がかかっており、そのうえに立地をめぐる企業などの利害打算が加わって地域間格差が生まれ、人口の過密・過疎問題が発生しているのも現実です。市民社会の形態学的管理の問題は、こんごともこの社会の大きな問題の一つでありつづけるでしょう。

肥大し、巨大化してきた都市には、人口流動性の増大にともなって共同性――というよりも共同意識――の弛緩という問題が生じました。デュルケムは、社会分業が拡大し、社会が巨大化して有機性の度を増すにつれて、かえって集合意識が弛緩し、アノミーすなわち規範意識の欠如が広がってくることを心配していましたが、この心配がまさに巨大都市のちまたで現実のものとなってくるのです。学ぶために、また職を求めて、大都市に流れ込んでくる人びとが、隣人とたがいに知り合うこともないようなアパートに住み、住民登録をしたとしても地域への一体感はなく、普通選挙制の結果せっかく与えられている選挙権にも関心のないようなケースが増えてきました。

市民であるべき人びとが原子のようにバラバラに（原子化）され、大都市を中心に普及してくる新聞、ラジオ、テレビなどのマスメディアに操られて群集行動に走ったり、逆に無気力になり無関心――アパシー――にとらえられて、「声なき民の声」などという形で政治家に利用されたりするようになるのです。市民が疎外されて大衆になるのであり、それに乗じてマスコミや政治家による大衆操作が出現するのです。社会が経済的不況などで危機的状態にあるときに、大衆化した市民をマスコミなどによって操作し、人種排撃や自民族中心主義を「現代の神話」にして、「（ドイツ）第三帝国」とか「大日本帝国」とかいう現代の独裁制をつくりあげる動きも出ました。ファシズムはイタリア語のファッショ（結束）から出た言葉ですが、テロリストの攻撃にたいして国民の「結束」を呼びかけ、一方的な戦争を強行したりするような市民無視の政治は、現代のアメリカでも起こっています。そういうときに市民はいわば脱市民化され、市民でありながら事実上主権を奪われた人びとの群、すなわちマルチチュードになってしまうことについては、別稿6.5 でみました。

そのとき、他方で、植民地状態から自らを解放してからまだそれほどの年数をへていない途上諸国には、下積みとして無視されてきて実質的にまだ市民になりえていない膨大な数の人びと、すなわちサバルタンがいるといいました。この人びとの圧倒的多数は、植民地解放後の諸国に、開発強行のために国内経済のバランスを無視して凄まじい勢いで膨張させられてきた都市の、底辺部と外周部にスラムをなして住み、正式な経済統計などでは

把握されないインフォーマル・エコノミーによって生活しています。世界的に広がった都市社会としての市民社会は、途上諸国や新興諸国では圧倒的にこのような相貌を呈していることも、忘れられてはならないでしょう。

5.6　市民社会の根本矛盾はどこにあるのか？

市民社会とは、主体化した市民が、普遍宗教よりも普遍的な科学技術のもと、国民という共同性を立ち上げて、市場を世界中に広げつつ産業革命を遂行し、都市を拡大しつつ農村をも都市化していく社会システムであることを、みてきました。これは、帝国という第一次社会システムにつぐ第二次の社会システムであり、まえにも指摘したように、人類は文明化して以後、端的にいってこの二つの社会システムしか知らないのです。

では、帝国の矛盾が、普遍宗教によるその無限膨張性と、農業が基本生産様式であることからくる補給力の限界とのあいだにあったのにたいして、市民社会の矛盾はどこにあるのでしょうか。19 世紀以来、それは、国民として広げられる共同性と、そのうえに形成される労使対立という階層性とのあいだにあるという見方が有力で、それを裏付ける階級闘争史観とそれにもとづく社会主義革命論が、20 世紀後半にいたるまでの世界を動かしました。しかし、私たちがみてきたところでは、ほんとうの矛盾は、国民と階級対立との矛盾を抱えるこうした市民社会どうしが、たがいに争いあいながら、まだ帝国の支配下にある諸地域をつぎつぎに植民地化し、最後は有力市民社会間の「帝国主義戦争」と「冷戦」で、人類そのものを絶滅の危機にまで追い込んだことにあったのではないでしょうか。

本稿 2.5 などでも述べたように、国民という共同性の根は深く、おそらくは人類の社会進化の基礎にある生物進化の層――血筋、体型、肌の色など――にまでさかのぼるものです。このうえに、いつ頃から使い始めたのか判然としない言語や、農業革命いご、環境に適応しつつ選択を重ねて形成されてきた生産様式などによって、まず特定集団――エトノス ethonos――が形成され、近代初期以降、相当数の類似のエトノスが、出版技術の普及などをつうじて共通化されていく言語――いわゆる国語――と、それを用いておこなわれる市場的経済諸活動の範囲――局地的市場圏――とをつうじて統合されて、形をなしてきたのが国民でしょう。だからそれは何重にも運命的なもので、時として人はそれに命を捧げても良いと思ったりするのです。

市民社会は、こうして、国民〔至上〕主義すなわちナショナリズムという対立しあう特殊性と、科学技術、民主主義、世界市場、地球的都市化を柱とする普遍性との矛盾です。資本家階級と労働者階級の対立も重要ですが、労働者階級の国際主義（インタナショナリズム）は、第二インターの崩壊や、中ソ対立のあげくのソ連崩壊と中国の現実主義化などによって事実上破綻し、資本家階級とりわけ大資本家は今や、社会主義圏の崩壊によって文字通りの現実となった世界市場で、したい放題の事業と投資――というよりも投機――

をおこなって巨万の富を築いているのが現実でしょう。巨大資本の投機などによる世界経済の混乱を防ぐためには、諸国民国家が団結し、巨大資本を規制していく必要があり、そのためには各国民国家の内部で市民が主導性を発揮して、よい政府をつくっていく必要があるでしょう。

しかしこうしているあいだに、市民社会システムは、もっと大きくてもっと深刻な問題を抱え込んでいることがはっきりしてきました。それは、このシステムがそれ以前とは比較にならぬ規模とスピードで環境を破壊してきたということであり、地球生態系の急激な変化が今や市民社会そのものの存立基盤を脅かすようにすらなってきた、ということです。市民社会のほんとうの矛盾はじつはここにあるかもしれないので、私たちはつぎに、章をあらためてこの問題を検討し、そのうえで、これまでに展開してきた社会膨張にかんする諸理論をまとめなければなりません。

6　生態系内在性と社会形成の空（くう）

6.1　産業革命と環境破壊

市民社会が興した産業革命が、工場制大工業を中心にして科学技術の発達を取り込み、原則として無限の生産力拡大に道を拓いたことを、5.4 でみました。18 世紀半ばにイギリスで始まった産業革命は、19 世紀以降、フランス、ドイツ、アメリカ、日本、イタリア、ロシアなどに波及し、これら諸国の帝国主義化をひきおこして、20 世紀前半に第一次および第二次の世界大戦を勃発させます。産業革命は、これら国民国家間の争いをつうじて、すでに激しく環境ばかりでなく人間そのものを破壊しつづけてきており、第二次世界大戦末期にアメリカで開発され、日本の広島・長崎に投下された原子爆弾はその集約の一つでした。

第二次世界大戦後は、アメリカとソ連を中心に核軍拡競争がつづき、冷戦の拡大は、1962 年のキューバ危機を頂点として、人類を絶滅の危機にまで追い込みます。この危機にたいして、日本や欧米諸国の市民たち、およびインドや中国をはじめ独立あるいは自立した第三世界諸国から、激しい抗議運動や平和運動が起こり、米ソは核兵器開発の相互規制に入らざるをえなくなりました。しかしこのかんに、植民地解放を達成した第三世界諸国は、政治的独立を経済的自立で裏付けようとして、全力をあげて開発政策や経済成長政策を展開し、これらを取り込みながら成長競争をつづけようとする米ソ両陣営と、それぞれの内部での国民国家間の成長競争をつうじて、環境破壊は各国内部から国境を越えて地球全域に拡大しはじめました。

人間の文明そのものがすでにして環境破壊であった、とはよくいわれることです。たしかにそうですが、文明帝国の環境破壊は、生産力基盤が農業であったためにその膨張力に

限界があったように、緑地帯を砂漠にするようなことはあっても、一定限度以上に広がることはありませんでした。しかし、地球上から本来の意味での帝国が消滅し、ほとんどの植民地が独立してからの産業革命は、文字どおり、工業を中心とする近現代産業の生産力無限拡大を野放しにしてしまったようなものです。森林を初めとする生態系、大気圏、河川・海洋圏などには、もともと国境などありません。日本のような海洋国家も、公害や廃棄物を規制の緩い途上諸国に「輸出」したり、公海に投棄したりして、環境破壊はあっというまに地球的規模に広がってしまいました。これらのうえになによりも、地球上で各国が消費する化石燃料その他が二酸化炭素を放出し、これらがいわゆる温室効果ガスとなって地球温暖化をもたらしてしまっていることが、現代の地球生態系の危機を象徴しているというべきでしょう。

市民社会の矛盾は今や、国民という共同性のうえに形成されるブルジュワジーとプロレタリアートの階級対立どころか、科学技術、民主主義、世界市場、地球的都市化の普遍性と国民国家間競争との矛盾をも越えて、世界的市民社会化と地球環境破壊との矛盾にまで深まってきてしまっているというべきかもしれません。ようやく自分たちの〔国民〕社会の主権者にはなっても、現代的「帝国」の独断専行によって脱市民化されてしまう市民たち、普通選挙制の未施行や不完全によっていまだに主権者としての市民になりえていない人たち、要するに基本的市民社会化の趨勢のなかで、いまだに世界社会はもとより自国社会においてすら十分な意味での市民となりえていない私たちは、この矛盾の深まりにたいしてどのように対処すべきなのでしょうか。

6.2　社会の生態系内在性と空（くう）

話が深刻になってきているところを一挙にはぐらかすようですが、2.1 の終わりで、人間社会が何をしようと、どうなろうと、それもまた自然の一部にすぎないのだ、といいました。冗談のようにみえて冗談でない、この冷厳な現実に立ち向かいましょう。

市民社会が国民的に分かれてそれぞれ固まり、争いあって地球生態系を危機に陥れてきましたが、これも自然の流れといえば流れです。市民社会は地球上いたるところに都市を広げてきましたが、そもそも都市は、自然のなかにつくられる人工物の集積のようなもので、とくに近代以降、鉄筋コンクリートの部分が多くなれば、自然のなかのオデキというか、もっと端的にいえばガンのようなものでしょう。地球の航空写真、さらには衛星写真が、砂漠化が進む一方、都市がほとんど無秩序に拡大してきている様子を映し出しています。こうした地表を囲む海洋の汚濁が進み、大気の汚染が進み、地球温暖化が進んできているのも、自然進化の現局面といえばいえるでしょう。

人間とその社会は、こうして生態系内在的であり、いずれにしても自然の一部なのですから、今よりももっとスピードを上げながら地球環境の破壊が進み、多くの社会の存続が

むずかしくなって、せっかく核戦争の危機を乗り越えたようにみえる人類が絶滅するのも、自然と社会を含む地球進化の筋道なのかもしれません。かりにそうならないとしても、人間社会はいつか、どのようにしてか、必ず滅びます。その意味では、私たちがこれまで懸命に考察してきた社会進化もすべて空しいのであり、一切は空(くう)なのです。普遍宗教のほとんどには多かれ少なかれそのような洞察がありますが、とくに仏教にもっとも鋭く現れているこのような認識を、私たちは心のどこかにいつももっていなくてはならないでしょう。

しかし、仏教では、一切の形あり色あるものはすべて空しい（色即是空）といったあとに、ただちに、だからこそ一切は形あり色あるのだ（空即是色）とつづけます。一切は空しいのですが、だからこそ、そのときどきにあるものは、私たちの一貫した視野、あるいは世界直観のなかでは意味があり、美しくみえたり、真(まこと)にみえたり、善きものにみえたり、あるいはそれぞれその反対――醜偽悪――にみえたり、それぞれの中間でどちらかになにほどか寄ってみえたり、するのです。だから私たちは、つねに一切皆空であると思いながらも、同時に、美しいものを求め、真なるものを守り、できるかぎりすべてを善くしていこうとします。

それでいいのではないでしょうか。1 で私たちは、西洋哲学の伝統にしたがって、市民が社会を、どのようにしたらとらえられるのか、あるいはとらえるべきなのかをみましたが、それもこうした視野のなかに置いてみればなおさら現実味を増してくる、とはいえないでしょうか。また、4.2 で私たちは、大自然に生まれて生きるために働き、老いて楽しみを知り、死に憩うのが人生なのだから、生まれるのも死ぬのも善いのだ、という老荘の考え方にふれました。これは一切皆空という世界観を人生観に展開したものだと思いますが、こうした世界観人生観を意識の基底にすえれば、すべてはアッケラカンと、曇りのない視野に明瞭にみえてきます。すると私たちには、あらためて、美しいものを求め、真なるものを守り、できるかぎりすべてを善くしていこうとする意欲が、湧き起こってはこないでしょうか。何が美であり、真であり、善であるかをめぐっては、もちろん、市民のあいだに必ずや意見の相違が生じ、論争が生じますが、そうしたすべてを民主主義的に決めていくことこそ市民社会の本領です。

そういう意欲と覚悟で、これまでに追究してきた社会形成の、社会膨張のダイナミズムをふまえながらもそれをはるかに越える、より複雑で大きなダイナミズムを整理してみましょう。

6.3　生態系のなかの社会膨張

現象学的還元、すなわち、私たちがいつのまにか身につけてきた世界への見方をできるだけ、くり返し、カッコづけながら、しかし生きるために暗黙のうちに受け入れてしまっている生活世界をふまえて、考えてみるかぎり、社会はまず共同性、階層性、システム性、

そして生態系内在性なのでした。そして、これら四つの基本相の相互連関を考えているうちに、私たちは社会の歴史を振り返ることになり、最後にあらためて社会の生態系内在性と大自然のなかにおける社会形成の空(くう)を見出すことになりました。

ここからあらためて整理してみると、私たちはまず、生きるために、大自然の生態系のなかに共同性を立ち上げるのです。家族がいくつかつながったバンドあるいはホルドのようなものとして。これがデュルケムのいう単環節社会で、これがいくつか連なったり離れたりして多環節社会を形成しながら、私たちは、長くとれば数百万年、短くとっても数十万年を生き抜きました。この意味での共同性は、男も女も、老いも若きも、みんな手をつないで丸くなるようなものですから、2.4 ですでにおこなったように、単純な円でこれを表象しておきましょう(図2)。

この共同性にはすでに自然分業にもとづく指導層と被指導層の分化が内蔵されているのですが、これらが顕在化してきて支配層と被支配層とのはっきりした階層性になるのは、人類が農耕をおぼえて文明を築くようになって以降の、共同性どうしの衝突による戦争などをつうじてでした。こうした衝突のくり返しをつうじて、共同性の範囲も広くなり、階層性の高さも度を増していって、大きなピラミッド形の社会が形成されていくのであり、社会はますます膨張していくのでした。階層性はまさに正三角形や二等辺三角形のものですから、それをひとまず正三角形で表象しておきましょう(図3)。

共同性を表象する円を平面図とみなし、階層性を表象する三角形を立面図とみなして社会を立体的に表象すると、円錐のようなものになります(図4)。文明時代いこうの社会のモデルはこのようなもので、それを象徴しているのが、この時代以降に築かれるようになった王や皇帝の墳墓、すなわち広い意味でのピラミッドであることは周知のことです。私たちはこういう社会を広い意味で階層社会と呼んできました。階級社会は、階層社会のなかで、支配層と被支配層との対立がとくに激しい社会と考えておけば良いでしょう。

こうした階層社会あるいは階級社会は、私たちが考えた社会膨張のダイナミズムをつうじて、理論的にはいくらでも大きく、高くなることが考えられます。だから、もっぱらこの論理の延長上で社会膨張を考え、「これまでのすべての社会の歴史は階級闘争の歴史である」ということも、不可能なわけではありません。しかし、そうした単純な考え方が、第二インターの崩壊や 20 世紀社会主義の崩壊など、人類史上にたいへん深刻な帰結をもたらしたことを、私たちはみてきました。

固定観念や雑念を取り払いながら単純に考えてみても、円錐形の底面が大きくなり、高さが度を増すにつれて、底面におかれる人びとは、自分たちの共同性の範囲を身体で感じることもむずかしくなり、自分たちの支配者を可視化することもむずかしくなるはずです。そのうえ、皆が一緒（共同性）ということと上下の差が甚だしい（階層性）ということとは矛盾するので、その感覚に耐えつづけるのもむずかしくなります。

逆に上から見れば、社会の範囲を見渡すのも困難になるばかりでなく、それをある形（秩序）に維持するのも困難になるということでしょう。そこで私たちは、じっさいの社会膨張は、人類が文明時代に入る以前から身につけていた道具使用と言語使用――インストルメンタリズムをふまえたシンボリズム――を用いて、いくつかの重要な装置を開発して社会をシステム化しつつおこなわれるのだ、と考えました。

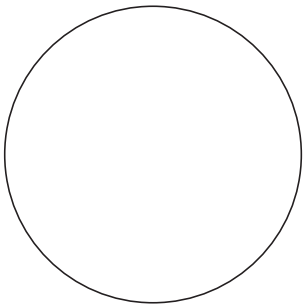

図２　　共同性としての社会

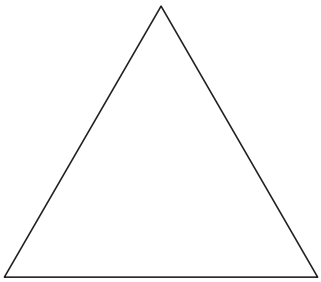

図３　　階層性としての社会

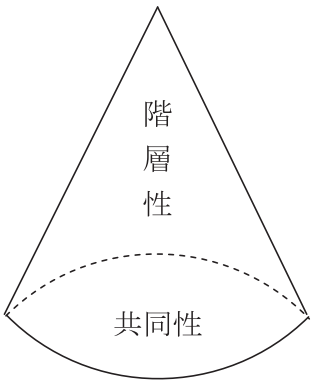

図４　　ピラミッド形の社会

6.4　四大装置による社会のシステム化

重要な装置は主に四つで、宗教、国家、市場、都市です。

人びとは、農耕をおぼえて文明を築きはじめるまえから世界と自分たちの社会について語りはじめていて、それらの語り（神話）は、社会の膨張――共同性の拡大と階層性の高度化――につれて複雑に織り合わされ、超越者にむけての飛躍などもあって、やがて多神教や一神教に進化していきました。そして、それらを語りあいながら自分たちの社会の起源やあり方を確認し合っているあいだに、聖なる場所や聖なる時が生み出され、聖俗分離をつうじた空間編成や時間編成がおこなわれるようになり、社会の構造と運営方法が確立されていったのです。

社会がさらに大きくなると、こうした語り合いやハレとケの循環を基礎にしたお祭りだけでは済まなくなり、世俗の権力が独立して、聖なるものの威光を背負いながら、社会をいわば物理的に直接に統治するようになりました。まずなによりも必要だったのは、敵を防ぎ、敵を打ち負かすための武力であり、それを維持するための徴税だったでしょう。軍隊ができ、税務組織ができ、それら全体を管理して社会を維持するための組織が必要で、支配層の家産をもとにいわゆる家産官僚制がつくりあげられていったはずです。宗教が担っていた機能のうちじっさいに社会を守り、維持管理する、いわば物質的な部分が独立して構造化され、デュルケムがいったように、宗教には世界認識とシンボリズムの面からの社会統合の機能が残されていきました。

こうして成立した国家にとって、最大の課題は市場の統制であったはずです。ここでいう市場は、剰余を生みはじめた農業を前提にやりとりされるようになった物資やサービスの交換ことで、手元に残るわずかの農産物と日用品などとの交換から、なんらかの物資と性的サービスとの交換などまでを含みます。こうした市場の展開は、国家からみると、重要な徴税源であるだけでなく、場合によっては放置すると社会の形（秩序）を乱すものなので、いくら取り締まっても漏れ出ていくとはいえ、できるだけ厳しく管理しなくてはならなかったものでしょう。

そのために国家は、もともと宗教の拠点であり、支配の拠点であった都市を拡充しつつ整備し、そのために設けた広場などに、社会の基礎を支える主要な交換をできるかぎり集中しようとしたはずです。こうして、都市はますます都市らしくなり、もともといた聖職者や、軍人や家産官僚などのほかに、農村から農産物や手工業品を取り寄せて販売する商人や、都市で手工業品を生産する職人をはじめ、聖職者や王侯貴族――貴族のもとは軍人や家産官僚――の職務と生活を支えるために、さまざまな物資やサービスを提供する非農業従事者が増えていきました。これらの人びとが市民の原型であり、帝国の力が強いところでは厳しい統制のもとに置かれていたものの、それが緩むところから、自分たち自身の新しい社会を形成しようとしていくようになるのです。

四つの装置を正方形の四辺に関連づけて表象しておきましょう（図 5）。宗教は、シンボリズムの威力にもっとも依存する、いわば人間文化の源泉であり、逆に市場は、人間の生活維持に不可欠の物質代謝（メタボリズム）をつかさどる、いわば経済の源泉です。両者を媒介する位置に、政治の源泉である国家と、狭義の社会につながる都市がある。社会のシステム化とは、こうした諸装置によって社会が多角化し、単純な円錐形から離れていくことと考えられますから、この四辺形を社会システム化の枠組として表象しておくことにしましょう。

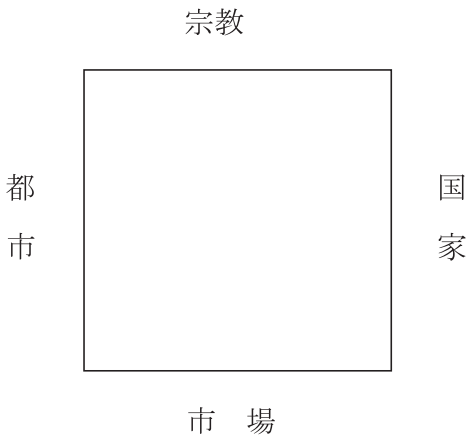

図５　　社会をシステム化する四大装置

6.5　帝国から市民社会へ

こうして、農耕をおぼえて文明を築きはじめた人類が、世界各地に展開した第一の社会システムは帝国でした。そのために、円錐形あるいはピラミッド形の階層社会どうしの角逐をつうじてせり上げられていった特異身体が皇帝で、皇帝が、宗教あるいは超越者の権威を借りて国家を管理し、市場化しはじめた経済を統制するために都市を発達させていったのでした。

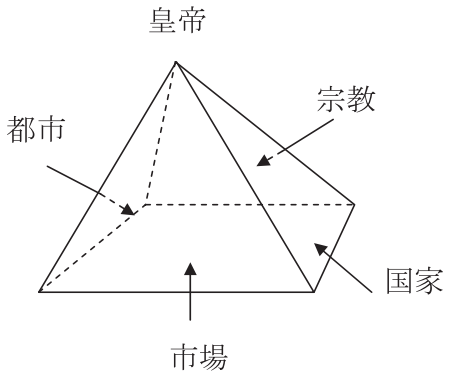

図６　　一次システムとしての帝国

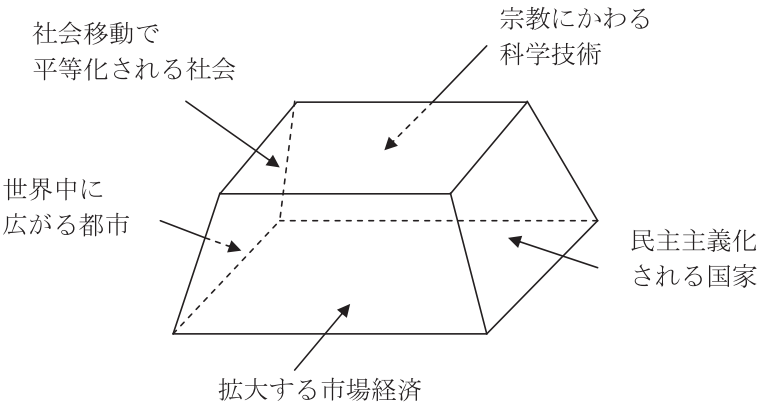

図７　　二次システムとしての市民社会

円錐形の社会の底面をシステム化の枠組で囲み、そのうえにピラミッドを建てると角錐になりますが、その四つの側面に宗教、国家、市場あるいは経済、都市あるいは都市と農村からなる社会、を当てはめてみます（図 6）。これは、装置によって媒介されたピラミッド形社会がそれなりに多角的あるいは多面的に分化しはじめたことを意味しますが、すべては一つの頂点すなわち皇帝というという特異身体に収斂し、そこから、超越者の威光を借りた一元的な強い支配がおこなわれていたことを意味します。市場と経済の根は、われわれの身体がそうであるように生態系に張られており、そこから突き上げる衝動で農民や都市民はしばしば反乱を起こすのですが、強い支配の壁を根本的に突破することはできませんでした。

しかし西ヨーロッパでは、西ローマ帝国の滅亡後、宗教を背景にした一元的な強い帝国ができず、宗教的権威のピラミッドと世俗権力のピラミッドがずれて、農業が発達して市場交換が活発化すると、その場としての都市が活性化してきます。そして都市は、宗教と権力との抗争を巧みに利用しながら自治の度合いをしだいに高めていき、ルネサンスと宗

教改革に加えて15世紀末から一挙に実を結びはじめた大航海の成果をふまえて、イギリス、アメリカ、フランスとつぎつぎに市民革命を成功させ、19世紀から20世紀にかけて、基本的には世界中を市民社会にしてしまうのです。

市場経済を活発化させながら、都市を拠点に、世界認識と社会改造の基本手段を宗教から科学技術に変え、市民革命をつうじて国家の運営手段を民主主義に変えていった市民社会を、帝国の角錐との対比でひとまず角錐台の形で表象してみましょう(図7)。市場経済の世界化とともに、都市が膨張しはじめ、社会全体が都市化しはじめますが、この動きを本格化する産業革命の指針となっていくのは科学技術です。国家は、国によっては王制や帝政の遺制を残したりしながら、三権分立の基礎に選挙制度をすえ、しだいに投票権者の範囲を拡大していって、普通選挙にもとづく市民民主主義で運営されるようになります。

産業革命をつうじて、支配階級としてのブルジュワジーと被支配階級としてのプロレタリアートとの階級分裂が顕在化し、最初は市民社会も、帝国のようなピラミッド形のシステムになっていくようにみえました。しかし、市民民主主義の普及とともに水平的および垂直的な社会移動が活発となり、多くの市民の地位の非一貫性の度合いが高まって、社会の形はしだいに角錐よりもむしろ角錐台に近いものになってきています。この角錐台が直方体に近づき、しかも平たくなっていけばいくほど、それだけ市民社会は、その理念である「自由、平等、友愛」に近づいていくことになるでしょう。

問題なのは、これまでの市民社会ではこの角錐台の底面が国民という共同性であり、有力な市民社会が国民国家を立てて、たがいに争いあいながら世界中を植民地化してしまったことです。18世紀末のアメリカ独立革命を皮切りに、世界中に植民地独立革命が広がり、20世紀末までに植民地は世界から消えましたが、独立した新生社会も国民国家を立てることになったため、国民国家かんの競争や対立が今でも世界のもっとも深刻な問題でありつづけています。国民という共同性の根は、人類進化の歴史をつうじて、風土から生態系にまで深く張られているので、その対立を克服して世界市民社会への途を拓けるかどうかが、人類社会史のこれからの最大の課題のひとつでしょう。

6.6　生態系内在性と社会・生態システム

しかし、そうこうしているあいだに、国民国家間の戦争や経済成長をめぐる競争から、環境破壊が地球的規模に広がり、地球生態系が人間社会の存続を許さないほどまでに破壊される可能性が出てきたのでした。市民社会が国民国家に分かれて固まり、争いあう事態を克服して世界市民社会への途を拓けるかどうかと、地球生態系破壊の危機が高まり、人間社会の存続を不可能にしてしまわないかどうかとが、競合するような事態になっています。

この事態をまえにして、私たちは、思い切った視座転換を試みたのでした。人間社会は

もともと生態系のなかに共同性を立ち上げることから始まっており、階層性の出現も、共同性の拡大と階層性の高度化も、宗教、国家、市場、都市による社会のシステム化も、帝国システムから市民社会システムへの転換も、いってみればすべて、生態系さらにはその基礎にある自然の進化――あるいはただの変化――なのだから、やがては必ず滅びるのであり、色即是空なのだと考えるのです。そうすると、すべてはアッケラカンと透視されてきますが、しかし同時に、だからこそ、今あるものにはそれだけの歴史があり、意味があり、美しいもの、真なるもの、善きものは、滅びの瞬間までも守られねばならないのではないか、という思いが高まってきます。つまり、空即是色なのです。

これを最後に図８のように表象しておきましょう。人間は、地球生態系のなかに共同性を立ち上げ、社会膨張のダイナミズムをとおして階層社会を大きくしていくが、平等と不平等との矛盾を緩和するため、宗教、国家、市場、都市などの装置を用いて社会をシステム化していく。こうしてできる帝国を、しかし、都市に育った市民たちが、市場を世界中に広げながら、宗教を科学技術に変え、帝政を市民民主主義に変えて、世界中を都市的社会にしてきた。こうして市民社会システムは、地球生態系のなかに、それに根を生やしつつもそれをはるかに越えてそびえ立ってきたのだが、それが国民という共同性の呪縛から解放されつつ、地球生態系の危機を克服できるかどうかが今問われているのです。

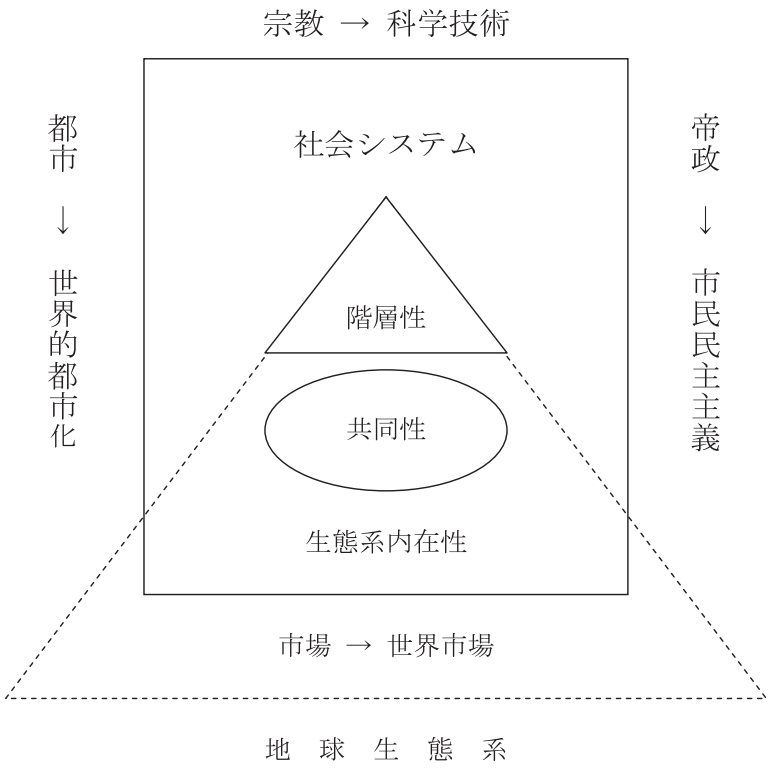

図８　社会・生態系への展望

こう考えてくると、もし生き残ろうとするのであれば、市民社会は、国民という共同性の呪縛から解き放たれるとともに、地球生態系をできるだけその内部に取り込んでいき――つまり内化していき――、いわば社会システムと生態システムとをできるだけ一体化した社会・生態システムつまり社会・生態系になっていく必要があるのではないでしょうか。現存の市民社会は、たがいに国民という共性の呪縛から解放されるにしたがって、世界市民社会に近づいていき、それと並行して、地球生態系をできるだけ内化していく、その度合いに応じて地球市民社会に近づいていきます。そして、もしこうした努力に成功すれば、地球上のすべての人びとがたがいに「自由・平等・友愛」を享受するだけでなく、人間とあらゆる動植物との最適な共生が実現することになるのです。

人類はすでに宇宙に進出しはじめていますが、他方では、パレスチナ問題に代表されるような社会間問題を解決できないでいるあいだに、大きな地震・津波やそれらによる原子力発電所事故などの大災害に見舞われています。人間社会の展開を人類史的視野からみるとき、そこに発生している多くの問題を適切な優先度をつけてつぎつぎに、また同時並行的に解決していくよう迫られますが、そのためにも、今や基本的に自分たちの社会の主権者になっている市民たちが、人間社会の展開にかんする一貫した理論をもって対処していくことがますます重要になってきている、といわなければならないでしょう。

後記：本稿は、庄司興吉「市民とはどんな人間のことか：市民のための市民学序説」(『清泉女子大学人文科学研究所紀要』32，2011）につぐ、「市民学入門」の第二部である。本誌に発表するにあたり、文体を「である」体に変え、注と文献リストを付すつもりであったが、本文だけですでに規定の枚数をかなり上回っているのと、内容的に読みやすくしたほうが良いという判断から、文体をもとのままにし、注と文献リストを割愛して、《講義》として出すことにした。本稿は、数年にわたる講義の成果であり、そのさいのノートをもとにしているが、全体的な再吟味のうえで書き下ろしており、録音したものの起こしなどに加筆したものではない。狙いは、私の構想する市民学を、水準を落とさず、できるだけ多くの市民に理解されるよう解説することであるが、まだ十分にこなれていない部分が少なくないかもしれない。読みやすくするため副詞的接続詞的な部分をできるだけひらがなにしたり、明らかな誤訳などを少しでもあらためるため United States of America をアメリカ合州国と表記したりしている。これらについて、あらゆる種類の感想を kokshoji@nifty.com にお寄せいただければ幸いである。なお、「市民学入門」そのものは、別稿と本稿に、第三部「『帝国』か地球市民社会か：市民による現代社会分析」と第四部「市民たちに今できること：市民的実践の指針」を加えて完成され、近未来に刊行される予定である。